アイドルマスターシンデレラガールズ 疾走のR

ヒロ@美穂担当P

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この場所首都高には、かつて《悪魔》や《迅帝》と呼ばれる者達がいた。そして、それを追う者達がいた。だが、時代の流れと共に首都高ランナーは減っていき、何時しか《悪魔》も《迅帝》も姿を消した…。それでもチューンドカーを駆り、深夜の首都高を走る者は消える事はなかった。

時は流れ、３４６プロダクションのアイドル原田美世は自動車整備工場で働きながらアイドル活動をする一方で夜は首都高を攻める首都高ランナーというもう１つの顔を持っていた。

ある日、３４６プロダクションに入社した新人プロデューサー小日向蓮。１９歳という年齢でプロデューサーをする事になった少年。プロデューサーとしては「変わった」プロデューサーである彼も首都高ランナーであった。

アイドルとして「間違ってる」美世とプロデューサーとして「間違ってる」蓮。そんな「間違ってる」２人が出会い、首都高の「伝説」を打ち立てた走り屋のことを知り、伝説の真実に近づいていく…。

注意!!

アイドルマスターシンデレラガールズと首都高バトル、湾岸ミッド

ナイト、首都高ＳＰＬなど様々な作品とのクロスオーバー小説です！
また、名前ありのオリジナル主人公が出ます。
そして一番大事なのが「処女作」です！（ここ重要）
初めての作品なのでミスなどあるかもしれませんが生暖かい目で見てくれると嬉しいです。ミスがあっても笑ってみれる方のみお読みください。ミスあるじゃねーか！どーすんのこれとなる方は即座にブラウザバックをオススメします。

目次

本編
序章　蒼いマシンとの出逢い ―― 1
一章　紅の首都高ランナー ―― 9
二章　駆け抜けていく者達 ―― 16
三章　悪魔のＺ ―― 22
四章　銀色の黒鳥（ブラックバード） ―― 29
五章　月の下の悪魔 ―― 39
六章　覚醒（ブレイク）する紅いＲ ―― 50
七章　悪魔のパートナー ―― 59
八章　復讐、未来からの逃走 ―― 64
九章　未来への加速 ―― 73
終章　夢の舞台に乗れ（ライドオンステージ） ―― 84
人物紹介などまとめ（ネタバレ注意）
マシン紹介 ―― 109
人物紹介 ―― 113
物語の裏話（ネタバレ注意!!） ―― 117
用語解説（ネタバレ注意!!） ―― 120

本編

序章　蒼いマシンとの出逢い

石川県の車屋の娘に生まれ育った原田美世は、子供の頃から車とスピードに魅せられていた。

誕生日プレゼントに欲しい物を聞かれれば、お人形よりも、かっこいいミニカーと答えた。自転車に乗れば友達と競走をよくしていた。勝てば大喜びするし、負ければ泣いて帰ってきたものだ。両親がいない時に弟の制止を聞かずに車を勝手に動かしてぶつけ、帰ってきた母親に怒られた事もあった。父親は苦笑いしながらも「俺達の娘だな」と言っていた。ある日鈴鹿サーキットへ、家族でレースの観戦に行った。

幼い美世は、帰りの車の中でこう言った。

「・・・レーサーになりたいの」

普通の女の子が言うことではない。ただ、車好きの子供なら高い確率で言う言葉だ。

「やっぱり、美世は俺達の娘だよ」

父親は、同じセリフを言った。

１０歳になり両親と共に西日本ジュニアカート選手権にチャレンジを始めた。

家族だけで挑戦するプライベート参戦という体制。ドライバーも監督も、メカニックもスポンサーも、チーム名も、原田一家。家族一丸となっての挑戦である。

ドライバーとしてもメカニックとしても美世は着実に成長していった。中学1年の時に西日本選手権で優勝2回、シリーズ2位を記録。その際あった表彰式の写真は美世の宝物として実家に飾られているそうだ。

中学3年時に全日本選手権にステップアップした。

2位1回、入賞3回を記録。プライベートチームとして非常に善戦した方だ。

だが、モータースポーツという競技上、お金がとにかくかかる。だんだんと一家の生活が苦しくなっていったのである。最終的にはシリーズ終了前に撤退を余儀なくされたのだった。

美世は一家のために「レーサーになる」という自分の夢を諦めてそれ以外で自分の好きな車に関われる事を探した。そしてカートを整備してきた経験を使えると考えて、自動車整備士を目指す事に決めた。だが、地元にはそのような事を学べる所はなく上京しないと行けなかった。父親は、こう言った。

「やれるだけやって来い。ダメだったときに、帰る場所は用意しておく」

弟は、こう言った。

「姉ちゃんが整備士になったら友達に自慢するから」

家族の後押しに、美世は涙を流した。

東京に向かうバスに乗っている時に1台の蒼い車を見た。その車はとにかく速さを体現していた。その車を見た時、美世は心の奥にしまった自分の夢を思い起こした・・・。

時は流れ、翌年の春。

通信制の高校へ進学すると同時に、自動車整備工場でのアルバイト。１５歳の美世は、多忙な生活に身を投じる事になる。

５年という時間が経ち、美世は自動車整備士になっていた。毎日忙しい中美世は自分の好きな車に触れる事を嬉しく思う一方で燻り続ける自身の夢への未練を感じていた。

ある日、２０歳の誕生日を迎える日に久々に休暇を貰って実家に戻っていた。自分が働いて買った自分の愛車に乗って。５年前のあの日に見た蒼い車「スカイラインＧＴ―Ｒ」（ＢＮＲ３４）を忘れられず、コツコツとお金を貯めて買った自分のＢＮＲ３４だ。ソニックシルバーのそのボディが眩しく映る。

久しぶりの家族との会話をして一家はなんとかやって行けていると。最近はよく高級車の整備をしてるなどと、いろんな話をした。だが、それでも満たされない思いでいっぱいだった。

休暇を終え、東京に戻ってきた美世はある日、海岸沿いの街をドライブしていた。燻るスピードへの思いを晴らせないものかとよく走る道だ。いつもの様に流してた彼女は1台の止まっているカローラを見つける。どうやら故障しているようだ。スーツを着た男が困り果てている。故障した車を見ると放っておけないのが美世だ。自分のRを止め男の方に近づいていく。

「あれれー?どうしたのー?エンストー?」

男は頷いた。

「そりゃ困ったね・・・あーあ、ほんとに止まってる。これはレッカーかな・・・。って、切羽詰まった顔してるねー。どうしたの?」

男が事情を説明する。彼は３４６プロダクションと言うアイドル事務所のプロデューサーであり、今日行われるアイドルのＬＩＶＥに向かっていた所、車が故障してしまい、ＬＩＶＥに遅れそうになっていると。

「ふーん。アイドル事務所のプロデューサーさんでＬＩＶＥに遅れちゃいそうなんだ。つまり、急いでる」

本気で困ってるプロデューサーが放っておけず、美世はセルを回して自分のＲのエンジンを掛ける。ＲＢサウンドが轟き渡る。

「・・・分かった!会場まで送ってあげる!あたしの車、乗りなよ!」

実はこのＲの助手席に人を乗せるのは初めてである。だが困ってるのを見て反射的にこう言ったのだ。

「シートベルト締めたー?」

プロデューサーが頷く。それを確認し美世はアクセルを踏み込む。

「レディ・・・ゴー!!」

ＧＴ―Ｒは咆哮のようなエンジン音を響かせながら走り出した・・・。

夕暮れになり、ＧＴ―ＲはＬＩＶＥ会場に到着した。久しぶりにスピードを出して走った事もあり、美世の顔は笑顔だ。

「はぁー♪楽しかったぁ~!着いたよー!・・・生きてるー?」

美世は夢中になってたので気づかなかったが走り始めて約１５分

でプロデューサーは気絶していた・・・。そんな事を知らない美世が声をかける。
「ほらほら、目まわしてる暇ないって♪アイドル達が待ってるんでしょ！いってらっしゃい！プロデューサーさんっ！」
会場に入っていくプロデューサーの背中を眺めてた。

数時間後ＬＩＶＥが終わりプロデューサーが会場から出てきた。美世は声をかける。
「よっ。終わった？」
どうしてまだここに？と聞くプロデューサー。
「いやいや、車置いてきちゃったじゃない？忘れてた？」
「ほら、乗ってよ。あたし、整備士だから、あの子のメンテもしてあげられるしさ。・・・大丈夫、次は飛ばさないで安全運転するから、ね？」
ここに来る時に飛ばしてた事を思い出し、付け加える。
プロデューサーを乗せ、プロデューサーの車まで送ろうとする。
「さて、お客さん、どちらまで？なーんて、車置いてきたところまでだよね・・・」
するとプロデューサーがとんでもない事を言った。
「トップアイドルまで」
美世は冗談だろうと思ったが、プロデューサーの真剣な目を見て考えを変える。
「・・・なにそれ？ふふっ。面白い人だね！勧誘か何か？ドライブしながら、話くらいだったら聞いてあげるよ」
とりあえずプロデューサーの車まで行く事にして切り出す。
「でも、話が横道にそれないように・・・。そこはちゃんとあたしのハンドル握ってね！プロデューサーさん！それじゃ、出発ー！」
そしてプロデューサーの話を聞いて、悩んだ末に自動車整備士をしながらアイドルとして活動する事を決めた。工場の親方にも家族にもこの事を伝えた。親方も家族も賛成した。
一週間後、正式に３４６プロダクションに所属した美世。慣れない

レッスンや写真撮影に苦労しながらもアイドル活動をしていく。
アイドルになってから2ヶ月後のある日、その知らせは飛び込んできた。
事故の知らせが入ったのは11時過ぎだった。事務所の中が急に騒がしくなり、部長達が飛び出していく。
「プロデューサーが事故った?!」
「マジかよそれー!?」
ちひろさんが慌てて駆け寄ってきた。
「美世ちゃん!レッカー車出して!事故車の引き取りをっ!」
「は・・・はい!!」
あたしはすぐに親方に電話をかけ、レッカー車を持ってきてもらう。
プロデューサーが事故った。プロデューサーが無事である事を願い、現場に向かう。

「すげーナ、ぐちゃぐちゃだよ・・・」
「うわ・・・」
「すみません、通してください!!」
場所は見通しの良い直線路。側道から出た11tトラックにプロデューサーが突っ込んだ形だ。
クルマは初めて会った時に乗っていたカローラ。フロントは見るも無惨に壊れ、ドアは千切れて吹き飛び、そして車内にはプロデューサーの血が飛び散っていた・・・。

プロデューサーは死んだ
側道から強引に出たトラック側にも非はあるものの、カローラの速度もハンパじゃなかったらしい。プロデューサーが遅刻しそうな時にはかなり速度を出すためそれは本当だろう。
事故の決着は何も教えられず、みんなも何も口にしなかった。プロデューサーの死はそれほどあたしたちにとって大きかった。よくあるテレビドラマのようにいろんなコトが一気に流れていった・・・。

２ヶ月後、新しいプロデューサーを募集することになった３４６プロ。でもあたしはぽっかりと心に穴が空いたままだった。どうしてこうなってしまったのか。そんな事を考える内にどんどん時間が過ぎていった。

四日後、新しいプロデューサー志望の人が面接に来たと聞いた。そのときあたしは苦手な写真撮影の現場にいたためまだ顔は見ていない。だが、聞いた話ではなんとあたしの一個下の男の子だと言っていた。今あたしは２０歳だからその子は１９歳か・・・・。しかも高校卒業直後だという。若いなーと思いながらＧＴ―Ｒを３４６プロまで走らせる。

翌日、その新人プロデューサーの歓迎会が朝早くから開かれる事になった。いろんなアイドル達が新しいプロデューサーを待ってる中、あたしはこちらに近づいてくる聞き慣れない音を聞いた。

「これ・・・ロータリーサウンド？」

程なくして駐車場に黄色い一台の車が入ってくるのが見えた。

「ＦＤ・・・？」

そのＦＤから一人の男が降りてきた。

「え・・・若い！まさかあの子が？！」

男、というより男の子としか言い様がない少年がＦＤを運転している事に驚愕する美世。

それを見ていた他のアイドル達も様々な感想を口にする。

「あの人が新しいプロデューサー？」

「かっこいいと言うより可愛いねー」

「あの車何だろう？」

などなど様々な感想が聞こえてくる。

そして彼が来た。ちひろさんが説明する。

「彼が新プロデューサーの小日向蓮君です！彼はプロデューサーとしては新人なので分からない所があると思います。皆さんで分からな

い所を教えてあげてください！」
　続いてちひろさんが彼に自己紹介させる。
「はい、この度プロデューサーとしてお世話になります小日向蓮です。・・・えっと、分からない所だらけですけどしっかりプロデュース出来るよう頑張るのでよろしくお願いします！」
　初々しさ溢れる挨拶の後に拍手で迎えられる小日向蓮と言う少年。
　あたしの一個下なのにそう思えないような感じがする。すごいしっかりしてるし・・・。
　その時、彼に質問が飛ぶ。質問したのは「ポジティブパッション」のメンバーの高森藍子ちゃんだ。
「小日向蓮さんってもしかして美穂ちゃんの知り合いなんですか・・・？」
　その時彼がびっくりしたような表情になった。そして彼が口を開く。
「・・・実は知り合いなんですよ。ちょっと縁があって・・・」
　その瞬間、質問攻めのスタートだ。身動き取れなくなる前にちひろさんが彼に質問攻めするアイドル達を離れさせる。
「後で聞いてください！とにかく今日から蓮君がプロデューサーになるので分からない事を教えてあげてください！」
　解散した後、あたしは彼に自己紹介した。
「あたしは原田美世。実はあたしも新人なの。よろしくねー」
「原田さん、よろしくお願いします」
　すごい素直な子だ。これは川島さんやレナさんに可愛がられるんだろうなぁ。
　そして、一番聞きたかった事を聞いた。
「あのＦＤは君の？」
　彼は頷く。
「僕のクルマです。初めて買ったクルマなので大事にしてるんですよ」
　彼のＦＤはパッと見でも非常に高いポテンシャルを持っているのは明らかだ。彼自身も「本物」だというオーラが出ていた。

「君よく走るの？」
「あー・・・。たまに色んな所にドライブを・・・」
話す場所がここだからはっきり言えないのであって本当は首都高ランナーというのは確実だ。
「チューニングはどうしてるの？」
「自分でやってます」
あたしと同じ・・・。見るだけでもとても丁寧な仕上がりであるのがわかる。本気で走る者という証だ。
「原田さん、もしかして車好きなんですか？」
今度は彼が質問してきた。
「うん、車大好きなんだ。昔はカートやってたの。今はアイドルと自動車整備士を掛け持ちしてるけど。それと美世でいいよ」
「・・・美世さん、よろしくお願いします」
本当に素直だなー。弟が出来たみたいだ。弟いるけど。
こうしてあたし原田美世と新人プロデューサーの小日向蓮君は出会った。

この二人が首都高の伝説を追う事になるのだが伝説に出会うのは後の話・・・。

一章　紅の首都高ランナー

美世と蓮が出会ってから三日が過ぎた。初めての仕事というのもあり蓮は緊張が顔に出ていた。だが、やり方さえ分かれば非常に手際よくしていく蓮は中々の働きぶりである。

美世は今日はダンスのレッスンだ。カートや力がいる整備士の仕事をやっているのもあり、ダンスは得意だ。

「ここの動きを直せばいいんですよね？」

トレーナーの青木聖さんに確認をする。

「ああ。もう少しキレがあれば完璧だな」

美世は体を動かす事にかけては非常に高いポテンシャルを持つ。反面、アイドルとして大きな特徴になるビジュアル面に課題があった。

「魅せるのがアイドルなのにそれが苦手なのがね・・・」

自覚はある。何せ美世は子供の頃から「普通」の女の子から大分離れてた。むしろ男っぽかったのである。

「写真撮影が好きじゃないし、化粧も苦手だからなぁ・・・」

話している間に休憩時間が終わり、再びレッスン再開。美世は残りのレッスンをこなしていく。

「大丈夫ですか？」

蓮に聞いてきたのは高森藍子だ。歓迎会の日に美穂と知り合いという事がわかり、その後詳しく話すハメになったのだが。

蓮と美穂は親戚という関係だった。蓮の母が美穂の母と同級生であり、蓮の父と結婚する際に蓮の母は地元熊本を離れて蓮の父の故郷の山形に来たのだ。結婚後に何回か熊本に戻った事もあり、蓮が生まれた後も遊びに行った。その時に蓮と美穂は出会っている。

藍子の問いに「平気だよ」と答える蓮。

「大分やり方分かってきたんだ。・・・コレをこうして・・・と」

その時年少組が駆け寄ってくる。

「プロデューサー！遊んでー！」

「うん。これだけ終わしてすぐ行くからちょっとだけ待っててね」
蓮は例え自分より年下でも優しい口調だ。実は、歓迎会があった日に小関麗奈のイタズラ（ブーブークッション）に引っかかっても、怒らなかった。むしろ麗奈を諭すようだった。その後清良さんに麗奈は怒られたが。
その時に清良さんに蓮はこう言っていた。
「僕ってどうしても人を怒れないんです。友達にも優しすぎるって言われて・・・」
「僕は多分、犯罪とかそういうのにあっても怒らないんだと思うんです」
あまりにも優しすぎる。芸能界でのミスはかなり大きな物だ。アイドルのミスで自分が責任を負う事だってある。だが蓮はアイドルを責めようとはしない様だ。
年少組に連れて行かれた蓮を見てちひろは呟く。
「いい人って言われてるんでしょうね・・・」

午後９時になり、蓮は仕事を終えて３４６プロを後にする。愛機ＦＤに乗り込み、自分の家に向かう。
「ふーっ、早く色んな事できないとなぁ・・・」
帰ってきて風呂に入り遅めの夕食を食べ眠りにつく。明日も早い。
翌日、蓮は美世のオーディションについて行っていた。美世にとって初めてのオーディションだ。蓮にとっても初のプロデュースである。
「美世さん大丈夫ですか？」
「・・・へっ!?」
「ああ、うん！コンディションはバッチリ！昨日も８時間寝てきたし」
「あたしのアイドルとしての記念すべき初レース！・・・頑張るしかない！うん、頑張れ、あたしっ！」
その時スタッフが部屋に入ってきて第一審査の開始を告げる。
「わっ！・・・もう時間かぁ。えっと、最初の審査は自己アピール、か」
「あたし、自分をアピールするのって、苦手なんだよね。上手くできるかなぁ・・・」

そして美世の番号が呼ばれる。
「は、はいっ！エントリーナンバー３４０番、原田美世ですっ！」
「えっと、石川県出身の２０歳で趣味は車とかバイクをいじること、です。・・・」
黙った美世に司会が問う。
「あー、それでおわり？」
美世はテンパってしまう。
「えっ！はい・・・あっ、いえっ！えっと、あたし、全然素人だし、女の子っぽくなくて・・・じゃなくって！と、とにかく、なんでも頑張ります！」

控え室に戻ってきた美世の顔は暗い。
「うう・・・失敗したよお・・・スタートダッシュ、完全失敗・・・」
「他の子はみんな、可愛いし、歌もダンスも経験者ばっかり・・・。あたしに勝ち目なんてあるのかな・・・」
「あります！」
「そう言ってくれるのは嬉しいけど・・・。あたしの魅力って、どこなの？」
「美世さんはダイヤの原石なんですよ！」
「原石・・・ダイヤの？あははっ、そんな大層なものじゃないよっ！でも・・・」
その時再びスタッフが部屋に入ってきた。
「次の審査の準備、お願いしまーす！」
美世は顔を上げる。
「・・ありがとう、蓮君。落ち込んでたってしかたない。自分のスペックで勝負するしかないってこと、だよね」
「・・・うん、あたし、行ってくる！」
そして第二審査が始まった。
「はい、次のコーナーはバラエティ適性審査！というわけで、モノマネいってみよう！」
動物のモノマネや芸人のネタでの自己紹介など様々なモノマネを

する出場者達。
　そして美世の番号が呼ばれる。
「はいっ！じゃあ・・・車のモノマネいきます！」
「ああ、車が趣味だから。あるある」
　その瞬間、美世はあの時聞いた「音」をイメージしていた。
「ブロロロ・・・プシュー・・・ブロロロ・・・プシュー・・・ギュルルルン！ギュルルルン！ブン、ブブブブン・・・ヴィーーー・・・ヴィン、ヴィーー・・・！」
「以上、ロータリーエンジンでした！」
　美世のそれはまるで１３Ｂその物だった。
「細かい！マニアックすぎでしょ！」
　そこから美世は火が入る。
「続きまして、今度はバイク！」
「続くの!?あはは・・・いいよ、やってみて！」
「では、最終アピールの時間です！何か伝えたいことがあればどうぞ！」
　美世は自分の決意を話す。
「はいっ！えっと・・・あたしは、歌もダンスもまだまだです。アイドルらしいアイドルとは、ちょっと違うかもしれません。でも、アイドルとして輝きたい気持ちは負けません！」
「今はまだ原石だけど・・・アイドル原田美世を、どうぞよろしくお願いしまーすっ！」

　後日、オーディションの結果が来た。
「・・・はぁ、残念だったなあ、オーディション。でも、最終審査まで残れたのは褒めてもいいよねっ！」
「すごかったですよ美世さん！」
「えへへっ、蓮君、ありがとうっ！最初はどうなることかと思ったけど、いいレースができたよ」
「でも、次こそは結果を残したいなーっ！」
「結果はあります！」

「それって？」
　蓮がスマホでＳＮＳの書き込みを見せる。
「えっと・・・『車の女の子、元気で可愛い』『地味にスタイル良くない？』『モノマネ、じわる』・・・これって」
「あたし、褒められてる？アイドルとして・・・わぁ・・・！すごいすごいっ！」
「初戦は負けちゃったけど、印象には残せたね！こんな嬉しいんだなあ・・・！」
「よーしっ、まだまだアイドルレースは終わらないもんねっ！次こそトップを目指すから！よろしくねっ、蓮君！」
「こちらこそお願いします」
　翌日、二人はオフを取った。蓮は出かけようと思っていた。すると美世から電話がかかってきた。
「あたしの家来れるかな？」
「良いですけど、どうしたんですか？」
「見せたい物があるんだー」
　ＦＤで美世の家まで行くと美世が手を振りながら家の前に立っていた。
「すみません、待たせてしまって・・・」
「いーのいーの。それに待ったと思ってないし！」
　美世は蓮を連れガレージまで向かう。そこには銀色のＲ３４が鎮座していた。
「あの・・・これは？」
「何ってあたしの車。今日は君に頼みがあって呼んだの」
「塗装ってできる？」
「一応できますけど・・・」
「あたしのＲを赤く塗って欲しいの。憧れの車の様に」
「美世さん塗装できないんですか？」
「あたし塗装できないわけじゃないけどね・・・。でもあたしがやってもあたしが望む赤色は作れなかったの」
「蓮君ならできると思って。無理言ってるのはわかる。でも蓮君じゃ

ないとダメだと思った！」
「すごい事言いますね・・・。・・・でもやる前からこんな事言ってもしょうが無いしやってみます！」
「ありがとうっ！ホント蓮君可愛いーっ！」
「そんな言われたら照れます・・・」
　数時間後、銀色だった美世のＲ３４は綺麗な紅色になっていた。
「すごい・・・！この色なの！」
「色々工夫入れてみました！」
「ありがとう蓮君！」
「この色の名前決めてあるので言っていいですか？」
「もちろん！」
「『ライドオンレッド』です」
「ライドオンレッド・・・。どういう意味？」
「突然ですけど、僕が来る前にプロデューサーさんがいたんですよね？」
　蓮から発せられた言葉に驚く美世。
　そうだ。蓮君は死んだプロデューサーの代わり。思い出したくなかった事が今出てくる。なぜ。
「なんで・・・プロデューサーが？」
「僕は詳しい事はわからないんですけどそのプロデューサーさんが美世さんにアイドルにならないかって言ったんですよね？プロデューサーさんがトップアイドルにするって言っていたんですよね」
　忘れるわけがない。あの日の事を。プロデューサーがあたしをスカウトしたあの日を・・・。
「プロデューサーさんは美世さんをトップアイドルにさせたいとしてたはずです。でも・・・事故で亡くなってしまったんですよね。ステージで輝く美世さんを見届る事ができなかった。でも、美世さんが好きな『車』ならいつもそばにいれると思ったんです。最高の舞台（ステージ）で輝いてる美世さんを見届けられるって！」
　プロデューサーが見れなかったあたしの姿。輝いてるあたしを見せる事がプロデューサーへのできる事なのか。

あたしの憧れがあの日見た赤いクルマ（GT―R）ならあたしが小さい頃のあたしの様に誰かの憧れになるんだ。
美世の頬を涙が伝う。美世は人前では泣かないようにしてた。蓮の言う通りだ。アイドルになった自分を一番近くで見ているのはプロデューサーだ。でも最後までいてやれなかった。自分を変えたのはプロデューサーだ。
変われなかった自分の代わりに変われ。
そう言うプロデューサーの声が聞こえた気がした。
「プロデューサーの想いを背負う・・・」
「うん、わかってる。あたし、変わる！」
泣きながらも強い決意の表情を浮かべる美世。絶対トップアイドルになるという決意を胸に・・・。

一週間後、オフを使って美世はＧＴ―Ｒのチューニングをしていた。アイドルとしても、まして社会人としても失格の行為である公道を非現実的な速度で走るために。だが、彼女は止まらない。もうひとつの夢であるレーサーという夢を追い続けるために。
ＰＭ１１：３５。
美世の家のガレージ内。ＬＥＤライトが真紅のＧＴ―Ｒと美世を照らす。真紅のＧＴ―Ｒのカーボンボンネットを閉じる。買ってから少しづつチューンを重ねてきた愛機。そして今はプロデューサーの想いを背負う物でもある。首都高で輝く驚異のチューンドカー。
スパルコのフルバケットシートに身を預け、４点式ハーネスでしっかりと体を固定。自らが車と一体になる感覚。美世の目は鋭かった。

同じ頃、蓮も自身のＲＸ―７に乗っていた。走りだけを求めた愛機ＦＤを走らせて戦場（首都高）に向かう。
二人が輝くステージでの一般人から見たらなんの意味もなく無意味な称号。「首都高最速」を争う物語が幕を開ける。

二章　駆け抜けていく者達

ＰＭ１１：５０。
谷町ＪＣＴから首都高速環状線に乗り、外回りを法定速度で走っている美世の紅いＧＴ―Ｒ。路面のわだちや継ぎ目のギャップを拾っては、車体が小さく跳ねる。締め上げられたサスペンションは、巡航速度では硬い。９号線に乗り湾岸方面へ向かう。１００ｋｍ程度の速度は、美世にとってはクルージングとしか感じない。デジタル表示の追加メーターで、マシンのコンディションを確認。
「水温８２、油温９４、油圧４ｋｇちょっと。ベストコンディション！」
５速、２０００ｒｐｍ。美世の手で組まれたＲＢ２６はその正体をまだ表さない。
原田美世は、３４６プロダクションのアイドルであり、自動車工場でも働く自動車整備士。
そして、首都高ランナーの一人でもある。
自らの手で仕上げたＢＮＲ３４スカイラインＧＴ―Ｒで夜な夜な走りに繰り出す。美世が一番気合いを入れているのが、改造車で公道をぶっ飛ばす事である。
アイドルはもちろんのこと、社会人としても失格の行為だ。だが彼女を止める事は誰も出来ない。
首都高速辰巳ＪＣＴから、湾岸線へ。川崎方面へ向かう下り線。直後、もう聞き慣れたあのロータリーサウンドが美世の耳に届く。
「蓮君か・・・」
美世は蹴っ飛ばす様にクラッチを切り、右足を連動させてアクセルを煽り、エンジン回転を合わせる。５速から3速にギアを叩き込むと、タコメーターは５５００ｒｐｍを指している。
アクセル全開と同時に、加速Ｇが美世の体をバケットシートに押し付ける。マインズ製チタンマフラーから放たれる直列６気筒エンジンの咆哮が、美世の背筋をゾクゾクと震えさせる。
「すごい・・・いいっ！」

トライアンドエラーを重ねたＲＢ２６のエキゾーストに全身が包み込まれると、美世の脳からアドレナリンが溢れ出していた。
美世の動きをじっくり見ながら、蓮は５速から３速にシフトダウン。５５００ｒｐｍにタコメーターが跳ね上がる。
「すごい・・・。美世さん速い・・・！」
Ｒ３４の丸４灯テールランプを見つめながらそう呟いた。
そして、前に倣ってアクセル全開。タコメーターとスピードメーターが平行して上っていく。
フルチューンの１３Ｂ―ＲＥＷを積む蓮のＦＤ３Ｓは鋭い加速を見せる。
軽量なＦＤの加速は美世のＲ３４の加速に匹敵していた。
時速１００ｋｍのクルージングから、流れる景色は激変していく。
（こうだ・・・。こうじゃないとっ！）
美世の視線の先に見えるのは道路を照らしてる街灯と、先を行く一般車両の赤いテールランプ達。
３速８０００ｒｐｍ。素早く４速にシフトアップ。その瞬間、一気に２００ｋｍまで速度が跳ね上がる。美世の後ろにいる蓮も同じように速度を上げていく。
僅かでもステアリング操作をミスすれば、人も車も粉々の残骸になる。狂ったような暴走行為でしか味わえないスリルが、全身を刺激していく。
美世も蓮も、スピードと言う麻薬にどっぷりと浸かっていた。一度体験したらもう、引き返せない。
スピードという麻薬がないと生きていけないという錯覚。本当ならやめた方が全然生きていける。事故で死ぬというリスクもないし、車のメンテなどもいらない。でも、そんな代償（リスク）なんて知ったものか。ただスピードさえあればそれでいい。
法定速度で巡航する一般車両を、縫う様に追い抜いて行くＲ３４とＦＤ。超高速のレーンチェンジを繰り返し、アクセルを床まで抜みつける。
「捕まえる・・・！」

蓮はＦＤのノーズを美世のＲ３４のテールに滑り込ませてロックオン。スリップストリームに入った。
フルチューンとは言え２ローターの１３Ｂ―ＲＥＷでは、ＲＢ２６の絶対的なパワーに敵わない。何せ蓮のＦＤは最大５２０馬力に対し、美世のＲ３４は５８０馬力。１００馬力近い差があるのだ。そこで蓮が取った選択。
その埋められない馬力の差は、前走車の後ろにぴったりと張り付いて、空気抵抗を減らす走法。スリップストリームと呼ばれる、レーシングテクニックを駆使する事だ。
蓮がＦＤで「前に出れない」と判断した時使う手だ。この技でＦＤ以上のパワーを持つハイパワーマシンを仕留めていく。
一度張り付いたら、前に出るまで絶対に離れない。
気づけば勝手に仲間達から付けられていたあだ名は〝公道の流星〟。首都高を流れ星のように駆け抜けていく黄色のＦＤはまさに「流星」。
例え、美世でも手は緩めない。
ＦＤのヘッドライトで、パッシングする蓮。
ＧＴ―Ｒのルームミラーに、ＦＤの青白い光が反射する。
（ちょ、蓮君眩しっ！）
思わず美世は目を細める。その間にも蓮のＦＤはジリジリと美世のＲ３４のリアバンパーに近づいていく。
二台の車間は、５０ｃｍあるかどうか。この距離で美世が少しでも減速したら蓮のＦＤは即追突。二人ともあの世に葬られるだろう。
これだけの距離で走れるのは、お互いの信頼があるからに違いない。
４速８０００ｒｐｍ。速度は２３０ｋｍ越え。２台とも５速にシフトアップ。
Ｒ３４のマフラーから、アフターファイヤーが噴き出し、ＦＤのフロントバンパーをかすめる。
５速６５００ｒｐｍ。時速２５０ｋｍ。湾岸線に合流して１分足らずで有明ＪＣＴを通過した。２台は東京湾トンネルに入った。

「前に・・・出るっ・・・・!」
蓮はブーストコントローラーのダイアルを2ノッチ捻り、更にブースト圧を上げる。
自ら組んだ１３Ｂ―ＲＥＷ。クロスポート加工にＴＤ０６ＳＨ２５Ｇの組み合わせ。ブースト1．２ｋｇで５２０馬力を発揮する、フルチューンロータリー。
ついに本気を出した蓮のＦＤ３Ｓは更に加速する。左車線にレーンチェンジして美世のＲ３４を一気にぶち抜く。
ミラーから光が消え、ロータリーのエキゾーストノートが左から耳に飛び込む。
「速い・・・。やっぱり本物じゃん、蓮君・・・」
一瞬だけ左のサイドウインドーから、黄色いＦＤ３Ｓの姿を見る。
「いやいやスゴすぎだよ・・・」
気がつけば美世は苦笑いを浮かべていた。
トンネルを抜け、緩い左コーナーに差し掛かる。
ＦＤ３Ｓのテールランプが少しずつ離れていくが、美世に焦る様子は無い。
「チャンスは最後まである・・・。どこで使う・・・？」
５速７０００ｒｐｍ。時速２５０ｋｍ越え。
まるで自分にぶっ飛んでくる様な一般車のテールランプを次々に避けながら、美世はＦＤ３Ｓのテールランプを追いかける。
２台は大井ＪＣＴを通過。２５０ｋｍ台でレーンチェンジを繰り返す中、一般車の流れがここで途絶えた。
蓮の視界に広がるのは、三車線の直線のみ。スロットルを踏み抜いて、ＦＤを前に進ませる。
そして、美世の視界に入る車両は、蓮のＦＤ３Ｓただ1台。
「お返しだよ、蓮君」
さっきのお返しとばかりに、今度は美世がＦＤ３Ｓの後方に車体を潜り込ませた。
デジタル表示の追加メーターを、美世はチラリと見る。
「水温９７、油温１２４・・・やれる!」

ＭＯＭＯ製ステアリングに取りつけた噴射スイッチに、美世は親指を伸ばした。
ナイトラス・オキサイド・システム。略称「ＮＯＳ」。スイッチを押してる間は、亜酸化窒素ガスをエンジン内部に噴射し出力を向上させる。
「ーーーーっ！」
空気の圧縮量の増加によりさらに出力が上がる。更なる加速Ｇで、美世の体はバケットシートに押し付けられた。
ＮＯＳも合わせ６５０馬力を絞り出すＲＢ２６のパワーで空気の壁を無理やり押し返す。
７５００ｒｐｍ。２７０ｋｍ。ＦＤ３Ｓのテールに、Ｒ３４のノーズが迫る。
直後、Ｒ３４最後のギアである６速にシフトアップ。２９０ｋｍ。美世はステアリングを僅かに右に傾ける。
スリップストリームから出た瞬間、空気の壁がＲ３４のボディをドン、と叩いた。
「行ける！このまま！」
美世は叫ぶ。同時に、Ｒ３４がＦＤを抜きにかかった。
２台は並んだまま、どちらのスピードメーターも３００ｋｍを指している。
だがＦＤのコックピットでは異変が起きていた。
「水温上昇、油圧低下・・・」
オーバーヒートである。
アクセルを抜くと一気に空気の壁に押し返される。
「美世さんすごいなぁ・・・。全然敵わないや・・・」

湾岸線下り方面、大井パーキング。
今の時間、ここに駐車してるのはＲ３４とＦＤのみ。とても浮いた光景である。
「あらら・・・」
美世はボンネットを開けた熱気が冷めない蓮のＦＤのエンジン

ルームを見ていた。
「美世さんのＧＴ―Ｒすごいですね・・・。手も足も出なかったですよ」
「いやいや蓮君の走り方もすごいよ。全然レベル違うし」
その後、２台は湾岸線を下って川崎線から横羽線上りへ。クルーズを満喫しながら、都内へと戻るのだった。もちろん、法定速度で。

これが美世と蓮が初めてのバトルをした時の事である。
当然、事務所からはいい顔をされるワケがない。だが、それをわかっていながらもやめれない。
これはスピードに魅入られた二人の物語である。

三章　悪魔のＺ

自動車工場で、美世は愛車のエンジンオイルを変えていた。
オイル交換作業を進めながら、蓮のＦＤ３Ｓと走っていた時の事を思い出していた。
蓮が見せたハイレベルな走り。そして一時的にとはいえ、蓮のＦＤは美世のＲ３４と互角の立ち回りをしていた。
１９歳という若さでどうしてあそこまでの技術を持っているのか。
右手でドレンボルトを取りつける。手で絞めつけた後にメガネレンチで適切なトルクで増し締めをする。
（あたしが出来ることは、自分のＲを信じて自分の走りをするだけ）
メカニックとして。走り屋として。美世にはプライドがある。
「美世ー、聞いてるか？」
後ろから呼びかけられ、ハッとしながら美世は振り返る。
「集中するのも良いけど、仕事はやってくれ・・・」
美世が働く工場の親方だ。彼も昔、首都高を走っていた走り屋だったそうだ。親方は美世に注意を促す。美世が整備しているのは客の車ではなく、マイカーだ。
「あっ、すいませーん」
全然心のこもっていない謝罪をした。
「それにしてもよ。気合入ってるじゃねぇか。なんかあったのか？」
「あたし、この間年下の子に負けそうになって・・・。あっちの車のトラブルで勝ったような物で・・・」
そう語る美世の目付きは、真剣その物。
「何にせよ、本気になるお前はこっちにとってもいい刺激になる。やるんならとことんやれ。・・・どうでもいいが光ちゃんのライブチケット持ってない？」
「持ってないですよ・・・」
美世が上京した１５歳の時からこの工場でアルバイトしており、この親方に自動車整備のイロハとチューニングの基本を叩き込んだ師匠である。そして美世の所属する３４６プロダクションの売れっ子

アイドルである南条光の熱狂的ファンである。ロリコンの疑い濃厚だが、メカニックの腕は超一流である。
とまあ、若干問題ありそうな人だが美世にとっては第二の家族みたいな人だ。１５歳で一人上京してきた美世を仕事しながら、面倒を見てきたのだ。こんな人でも美世にとっては、とても恩がある。
美世が免許を持ってない時、一度だけ彼が運転する真紅のＦＣ３Ｓの助手席に乗り、首都高を走ってもらったのは今でも覚えている。免許を持ったら、絶対走ると決めていた。
程なくＲの整備を終わした美世は客の車であるワゴンＲの整備に取り掛かった・・・。
丸一日かけて、ワゴンＲ以外にセルシオやパジェロの整備もして美世は一足早く仕事を終える。
着替えをして荷物をロッカーに仕舞った美世が工場を出ようとすると親方が美世に告げる。
「光ちゃんのライブチケット取れなかった・・・」
「えぇ・・・。なんであたしに・・・」
「まぁ、それはそれ・・・と言いたくないけどな。と言うよりコッチの方が言いたい」
「何ですか？」
「美世、悪魔って知ってるか？」
「知ってます。『悪魔のＺ』でしょ？」
悪魔のＺ。首都高を走る走り屋なら誰もが一度は聞いた事がある名前。
まるで意思を持つかのように、また「くるおしく身をよじるように」走り、何度もクラッシュを繰り返し、数々の死亡者や負傷者を出したことから「悪魔のＺ」として伝説化したＳ３０Ｚ。
何故。今になってその名前が出たのか。
「最近、横羽線の方で見たってよく聞くんだわ」
あたしはオーナーが悪魔のＺを「手放した」と聞いた。
何があったのかは知らない。でも、その男はＺを降りている。
「もしも湾岸であったらちぎられるだろうナ」

「簡単に言わないでくださいよ・・・」
美世はＲを走らせ、首都高へ向かった。
仕事を終わした蓮はある珈琲店にいた。
そこのコーヒーがすごい美味しいと評判で蓮も通っている。その為、その珈琲店の娘とも、顔馴染みであった。
また、首都高ランナー達がよく集まる店でもあった。
蓮はカフェオレを飲んでいた。ブラックコーヒーは飲めない蓮。偶然にも、そこの珈琲店の娘もブラックコーヒーが飲めないという。
カフェオレを飲んでると周りの客の声が聞こえてくる。
「おい、聞いたか!?」
「聞いたぜ。悪魔のＺがいるって」
「あんな速いヤツ追えねーヨ」
悪魔のＺは名前だけなら蓮も知っていた。
Ｌ２８改３．１Ｌ。排気量３１３４ｃｃツインターボ。その気になれば８００馬力を発揮するという本物のチューンドエンジン。
見た事ないが、聞くだけでもレベルが高いのはわかる。
だが、蓮は何となくだが、こう思ってた。
「多分近いうちに見るんだろうな」
店員がカフェオレのおかわりを聞いてきた。
「あ、今日はあと帰るので・・・」
「いつもありがとうございます」
「また来ます、羽沢さん」

ＰＭ１０：３５。
美世はＣ１（首都高速都心環状線）を走っていた。
「いないなぁ・・・。すんなり会えたら苦労しないし」
その時、美世の耳に聞いた事のない音が聞こえてきた。
「これは・・・!?」
直後、バックミラーには明るい光が飛び込んできた。
空気が震える本物のチューンド
ミッドナイトブルーのそのボディは見た者を惹き付けるー

「悪魔のＺーーーっ！」
現れた悪魔のＺ。Ｚは美世のＲ３４を撃墜（オト）すかどうか見定めているようだ。
その直後、５号線から１台のガヤルドが合流してきた。金持ちが乗ってそんじょそこらの車には負けないという、所詮「マナーが悪い雰囲気組」だ。悪魔のＺと美世のＲ３４を激しくパッシングする。
美世のＲ３４が９号線辰巳ＪＣＴへ入る。ゆるく右に入るコーナーを半開（パーシャル）で抜け、立ち上がりでアクセルオン。そこから湾岸線合流。有明方面へ向かう３台。
１１号台場線。レインボーブリッジをフルスロットルで走り抜ける。ガヤルドがまず悪魔のＺを左からまくる。続いて美世のＲ。
「あばよっ！型遅れ！」
その瞬間、前のトラックが車線変更。ガヤルドの前に出てきた。ぶつかると判断しハンドルを切るが、コントロール不能。コンクリートウォールに激突する。
吹き飛ぶガヤルドのパーツを避けながら、ＺとＲ３４は浜崎線ＪＣＴへ。Ｃ１内回りへ進むルートだ。
事故でこれ以上湾岸線を走れないと判断したためである。
Ｃ１内回り浜崎橋より汐留Ｓ字へ。危険な銀座エリアを駆け抜けていく。直後、美世は信じられない光景を目にした。
ＧＴ―Ｒ以上の速度でインからＧＴ―Ｒをぶち抜くＺを。
動き方を見て美世は直感した。Ｚがドライサンプ化されてると。
ドライサンプとはＥｇ（エンジン）潤滑方式の一つを言う。一般の車はウェットサンプでＥｇの下にオイルパンがあり、オイルポンプで圧送したオイルはＥｇをぐるりと回りオイルパンに戻る。３５Ｒも含め歴代ＧＴ―Ｒは全てこの方式を取っている。
ドライサンプはオイルタンクを外部に設定しオイルパンは存在しない。レーシングカーは基本的にこれを採用する。だが市販車もドライサンプ式を採用している車両が存在する。空冷エンジンのポルシェ９１１やフェラーリの車両がそうだ。
ドライサンプのメリットは２つある。

油圧系の安定とＥｇコンパクト化による重心低下。
デメリットはオイル循環系のコスト増。
Ｅｇの重心がドライサンプ化で下がった事で外から見てもわかるほど軽快な動きをしていたのである。
前に出られた美世を嘲笑うかのように一気にＲ３４を引き離して美世の視界から消えたＺ。美世は驚くしかなかった。

次の日、工場で親方にこの事を話した美世。
「そりゃ相手が悪すぎるってモンだ。くぐり抜けてきた物が違う」
親方にバッサリ一蹴される。
「つーか、まだ生きてたのか・・・悪魔よぉ・・・。」
「というか『迅帝』は？」
「アイツはもう降りた。車も処分したと聞いてるさ」
首都高の走る伝説と呼ばれる走り屋。ベイサイドブルーのＢＮＲ３４スカイラインＧＴ―Ｒであらゆる首都高ランナー達を次々と撃墜した。しかし突然姿を消し最速の称号だけを残して消えた存在。
美世がバスで上京した時に見た車だ。もう存在しないという事実が美世に衝撃を与えた。
「えぇ・・・」
「アイツは引き時を探してたさ。ただ速く走ってただけでこう大きく盛り上げられてしまったんだ」
「『迅帝』が降りても『悪魔』は健在だ。お前が追うのはもう居ない方より今存在してる方じゃないのか？」
「・・・ですね」
蓮は今日は地方営業だ。年少組達の営業に出ていた。
赤城みりあや龍崎薫といった元気いっぱいのアイドル達とバスで昼ごはんを食べていた。
渋滞でなかなかバスが進まないのである。
「渋滞でごめんね、みんな」
「ううん、だいじょーぶだよ、プロデューサー！」
みりあが答える。

「うん・・・プロデューサーも・・・ペロも一緒・・・。楽しい・・・」
「みなさんと一緒にバスでお弁当を食べるのも楽しかったですよ～。ヒョウくんも、お腹いっぱいみたいで～」
　みりあと薫がみんなの箸とプラスチックを手早く集める。
　すると窓の外に大きな山が見えてきた。
「見てみて、プロデューサーくん！あっちにおっきい山が見えるよ！あれって富士山!?」
「そうだよ。あれが富士山だよ」
「あれが日本一のお山なんだー！愛海ちゃんがいたら登りたがったかもね！」
「せんせぇ、かおる、知ってるよ！富士山には、やっほーって叫ぶんだよねー！やっほー！」
「「やっほー！」」
「やっほーです～」
「・・・やっほー・・・」
　蓮も一緒に叫ぶ。
「やっほー！」
「あっ！これってもしかして、カラオケの機械？ねぇねぇプロデューサー、お歌うたってもいーい？」
「いいよ」
「やったー♪みりあ、歌いまーす♪プロデューサー、なんでもいいから曲おねがーい！」
　蓮が機械を操作すると『ＴＯＫＩＭＥＫＩエスカレート』が流れ出す。
「あっ、美嘉ちゃんの曲だー！それじゃあみんなっ、一緒にー！」
　この後みんなでカラオケ大会した。
　それからしばらくして。
　みんなアイドル達はみんな眠ってた。スタッフが呟く。
「・・・みんな、はしゃぎ疲れて寝ちゃったみたいですね」
「あっ、騒がしくてすみません！」
「いえいえ！みんな、とっても可愛くて。元気な声が聞けて楽しかっ

たですよ」
「毛布はありますか？」
「あっ、はい！すぐに用意しますね♪」
「みんな、お疲れ様」
一人山形から上京した蓮にとって見るもの全てが新鮮だった。
本でしか見た事がない、富士山。蓮は上京してプロデューサーをやってると言う実感がやっと湧いている感じだった。
その一方で首都高に対する思いは冷めない。
再び美世と戦う事を信じて。

四章　銀色の黒鳥（ブラックバード）

私はアイドル桜守歌織です。
突然ですけど、今の状況を説明させてください。
有名モデルの秋川零奈さんと銀色の車に乗る男の人がなんか話しています。言ってる事は多分車の事だと思うんですけど私にはよくわかりません。
どうしてこうなったんですか・・・？

３０分前。
複数の事務所合同でのグラビア雑誌撮影を終えた歌織。今日の撮影にはベテランモデルの秋川零奈さんが参加していたため現場はピリピリしている・・・と思いきや、零奈さんはとても話しやすい人だと思った。スタッフ達も気さくに話しており、親しみやすいと感じた。新人アイドルの私にも優しく、わかりやすいアドバイスをしてくれた。
３４６プロのアイドルの原田ちゃんが零奈さんになんか話をしていたが、すごい話が弾んでるようだった。
零奈さんと同じ事務所のアイドルの若宮ちゃんが師匠と仰ぐだけあり、撮れた写真は非常にいい物だった。
そして撮影が終わった後、事務所の人達は打ち上げに行くと言っていたが、零奈さんは帰ると言っていた。なんでも昔の知り合いが紹介した人と会うらしい。
何となく気になって、零奈さんに聞いてみた。
「昔の仲間が会ってみてくれって言うの」
昔の仲間という発言に疑問を覚えたが、私は聞いた。
「私もついて行っていいですか？」
「ええ、もちろん。でもつまらないと思うわヨ（笑）」

駐車場に行くと零奈さんの白い車が止まってた。
名前はＧＴ―Ｒというらしい。零奈さんは「ベテラン」と言ってい

たけど実際、この車は軽く２０年前の車らしい。零奈さんが免許を取り、初めて買った車がこの車だと言っていたからなんと２０年近く乗っていることになる。ただ、本人が言うには少しの間乗っていない時があったらしい。

零奈さんはモデルになってから少しして渡米してモデル活動に専念していた時期があったと聞いたから間違いないだろう。

零奈さんが運転するＧＴ―Ｒで待ち合わせ場所に向かう。

しばらくして待ち合わせ場所に到着。

誰もいないパーキングエリアで待っていると、耳を塞ぎたくなるようなエンジン音が聞こえてきた。

銀色のスポーツカーがこっちに向かってくる。

零奈さんが車を降りた。

銀色のスポーツカーを運転してた人も降りてきた。

「はじめまして、レイナさん。俺、瀬戸口ノブって言います」

「どーも。秋川零奈よ」

瀬戸口ノブという男性が零奈さんと話す。

「突然だけどこれ『ブラックバード』よね？」

「えぇ、預かり物ですけど」

ブラックバードという単語に困惑する歌織。

父が自衛官である歌織だが、ある航空機の愛称に「ブラックバード」があると聞いた事がある。でもなんでその名前が・・・？

とまぁ冒頭に戻る訳だ。

ざっくり言うと、「秋川零奈が昔の仲間が紹介した人に会いに行き、ついて行った歌織は瀬戸口ノブと言う男と話す零奈を見てたが、話してることが多分車の事だろうけど全然わからない」という状況だ。

読むのがめんどくさかったらここを見ればＯＫだ。

「懐かしいわ。いくら追いかけても追いつけない。でも、必死に追いかけ続けた」

「初めて見た時ビビりましたヨ」

「『ブラックバード』なのに銀色じゃない（笑）」

「こうでもしないと乗れなかったんですヨ・・・。借り物ってのもあったし」
「あの人が背負ってたモノはとにかく大きかった。ソレを俺が背負うってなるととにかくプレッシャーがスゴくて・・・」
「・・・」
「ねえ、ところでこれいつ返すの？」
「返せないんです」
「えっ？」
「もう返せなくなったんです」
「あの人が帰ってくるまで俺が預かる事になってたんです。２年経って
　帰ってきたんですけど、あの人はあっちでなんかあったらしくてスゴい偉い立場になったらしくって。以前の様に自由に乗ることが出来なくなったって言っていて・・・。返そうにも乗れないという事で返す機会が無くなってしまったんだ。結局検切れになって俺のＦＤと一緒にガレージに封印してたんですけど・・・。でも、「伝説のマシン」を朽ちさせるワケにはいかないし。たまにですけど、首都高を流してたんですよ。走ってる９６４を見て昔の思いが再燃しないかなと思って」
「でも、あの人はもう降りてるんです」
「そうか、もう走らせれない・・・」
　ブラックバードはある事故をきっかけにモノコックを切り刻み、パイプフレーム＋カーボン外装という超軽量仕様になった。恐るべき速さを手に入れた代償に車検取得不可能になり、残り1年で廃車という「余命」を告げられていたのである。
「返そうにも返せないし、処分しようにも伝説を終わらしたくない。決断ができないんスよ・・・」
　言ってる事はよくわからないがノブという男は決めれない問題があるようだ。
「はぁ・・・どうしようかね・・・」
　ふと、ノブが視線を動かすと歌織と目が合う。

「そういや、この人は一体何です?レイナさんの知り合いっスか?」
レイナが説明する。
「この子は仕事仲間よ。桜守歌織って言うの」
「桜守歌織と申します。瀬戸口ノブさん・・・でいいのでしょうか?」
「ノブでいいよ。桜守さん」
「聞いてる時病院の名前が聞いた事がある所だったんですけど・・・」
「父に聞いてみますね。父がいろんな所と知り合いなので」
歌織の父は非常にいろんな所に顔が利く。病院の院長とも知り合いがいるほど。
電話を終えた歌織はこう告げる。
「島達也先生でしたよね。先生は今病院にいると。父が話をするなら夜11時に行くと予定がないと言ってました」
ノブの顔に驚きが浮かぶ。
やっと返せるかもしれない。期待を胸にする。
「今から行ったらたぶん丁度じゃないかしら?」
「そうっすね。行きますわ」
どうやら島先生がいる病院に行くらしい。歌織にレイナが声をかける。
「どうする?ついて行く?」
「あ、じゃあ俺乗せます」
あれ・・・?なんか一緒に行くという話になってる・・・?
結局歌織を連れて病院に向かう事になった。

夜の横羽線を駆け抜けていく銀色の964と白いR32。
20年以上前の車とは思えない程機敏に動き、走り抜ける。
「ノブさん・・・速い・・・!」
「え、マジすか?」
レイナのRが先行しているのだが、レイナのRは軽く280kmは出ているだろう。ノブの操る964もそれに負けないペースで追走する。
これだけの速度で走る車なんて歌織は初めての体験だ。スピード

への恐怖で背筋が強ばる。もっとも歌織の運転も別の意味で恐怖モノだが。
一般車を縫うように抜けていく2台。病院に着くまで超高速ツーリングを楽しんでいる様だった。
ＰＭ１１：００。
病院に着いた。レイナとノブは久しぶりにトバしたためいい笑顔だが歌織はそうもいかず、顔面蒼白である。
「いや、すいませんね・・・」
ノブの謝罪も耳に入らないほど。
歌織の父が掛け合ってくれたお陰で、すんなりと事が進み島が呼ばれる。
看護師に連れてこられた人物。
かつて「首都高速湾岸線の黒い怪鳥」「ブラックバード」「湾岸の帝王」と呼ばれた伝説の男。
首都高ランナーから妬まれた絶対的速さの象徴。
彼こそが「ブラックバード」こと島達也だった。
「それで、僕に客って・・・君か」
「会いたかったヨ・・・」
「おお、変わったねぇ島センセー」
「君も変わったんじゃないか？」
「そう？随分立派な立場じゃない島センセー？」
「話はわかったが・・・もう僕は走らないと決めた。二度と」
「え～っ、昔あれだけやってたのに～!?」
「昔みたいに出来る立場じゃないんだ。もし何かあったら責任問題だ。昔が異常だったのがわかるんだよ・・・」
「車だけ置いて逃げるの!?」
「・・・」
島も９６４をどうするか迷ってるようだ。かつて、ノブに託したがノブ自身は島への返還を望んでいる。だが、帰ってきたところでもう乗れない車を持つのもいい感じはしない。
「あの・・・」

口を開いたのは歌織だ。
「せめてもう一度だけ乗ってみてから考えてみたらどうでしょうか・・・？」
「彼女は・・・？」
「桜守歌織。アイドルよ」
「君のお父様が僕に聞いてきたんだね・・・。歌織さん、このモンスターマシンを何故持たないかわかるかい？」
「わかりません。でも、車は元は先生の物だったと聞いています。先生に返したいノブさんの言い分を少しは聞いてもいいんじゃないんですか!?」
驚いた様な表情で歌織を見るレイナとノブ。
少しの沈黙の後、島は口を開いた。
「わかりました。一回だけ乗りましょう。その後に貴方が運転して何故僕にこう言ったのか貴方の運転で見せてもらいます。それでいいですか？」
「はい！」
「すみません、少しだけ出てきます」
「どちらまで？」
「少しね・・・。一時間で戻る！」
島はかつて自分が狂ったように入れ込んでいた９６４のシートに身を預ける。セルを回し、エンジン始動。
空冷エンジンらしい乾いた音が響く。
その瞬間、島の脳裏に悪魔のＺと、いや、様々な挑戦者と悪魔のＺとのバトルの記憶が浮かぶ。彼の冷めていた走りへのモチベーションが熱を帯びて復活してくる。
「では、行きましょうか」
島が選んだルートはブラックバードが速さの象徴として輝いていた湾岸線。だがあるときを境に、湾岸で３００ｋｍオーバーを狙う車では無くなった９６４。それでも、３００ｋｍオーバーを狙って走り続けたーー。
数十年ぶりに走る湾岸。あの頃とはもう違う。今は物流が２４時

間途切れない高速道となった首都高。
それでも首都高ランナーは走り続ける。
「ーーーー!」
その時、ブラックバードの動きが変わった。
Ｒ３２で追いかけるレイナとノブは感覚的に「ブラックバードが戦闘態勢に入った」という事に気づいた。
伝説（ブラックバード）が相手をするに不足なしと判断した標的（ターゲット）が現れたのだと。
「再び見るとはね。時代を越えて走り続ける奇跡のマシンって言うのは本当みたいだね・・・。北見さん・・・」
数十年ぶりに再び出会う。初めて見たあの日と変わらず、見る者を惹きつけるそのミッドナイトブルーのボディ。
スピードの神に反逆し、そして愛されたスピードの化身ーー。
「悪魔のＺーーーーっ」
その瞬間ブラックバードは猛加速。Ｚも負けじと追いかける。
「ちょっと、本気じゃない!!」
「・・・あれが湾岸の帝王の走り・・・!」
加速していくブラックバードはブランクを感じさせない走りだ。
銀色の黒鳥（ブラックバード）がスピード（悪魔）の化身（Ｚ）に挑む。数十年ぶりの争い。待ち侘びていたかのように。
「アキオ・・・お前は走りを辞めなかったんだな。諦めかけてたよ。だが、やはり最高のパートナーと走れる。これ以上の幸せなど何処にあるっ!!」
「アキオ・・・？いや、違います。あの車を運転してるのはーー」
歌織が最後まで言い終わらない内にさらに速度を上げる。
上がり続ける走りへのモチベーション。ノブは二台から「オーラ」が現れるのが見えた。
このまま長く長く走り続けたいーーー。
だがソレを裏切るかのように、Ｚが失速する。
みるみるバックミラーから消えていくＺ。
島のモチベーションもそれに連動するかのように消えていく。
「・・・・」

あっという間に終わってしまった時間。だが、島は忘れていた「走り」への情熱が完全燃焼したのを感じていた・・・。
「一人で盛り上がってすみません。約束通り次は貴方が運転する番です。歌織さん」
交代して運転する事になった歌織。
人の車。スペックはバケモノ。
病院に来る時、ノブの運転で顔面蒼白になっていた彼女だが言ったからにはやるしかない。
「では行きます」
歌織の運転するブラックバードはゆっくりと走り出した・・・。
来たルートを戻る形で走るブラックバード。
歌織が運転するのはその気になれば７００馬力を発揮するモンスターマシン。並の人間はまず操れる訳がない。
ブラックバードのセッティング上、曲がりにくい。強アンダーセッティングのブラックバードを曲げるのはもちろん、それを自由自在舞うように動かすのは至難の技だ。
コーナーでラフに踏んだらあっという間にコントロール不能に陥る。
島は曲がらない車を力で強引にねじ伏せていく。そんな乗り方だ。
もちろん、歌織にそれが出来るような力はない。
だが、島は歌織の運転に気づく事があった。
「力で押さえつけず、車の動きに自分が合わせる」
普通「ドライバーの動きに車が応える」という考え方だろう。
だが歌織は「車の動きを元に自分がソレに合わせる」という常識を覆す操り方をしていたのだ。
当然、車の挙動は乱れが存在する。それにすら自身の操作を合わしているのだ。島には考えられなかった。
どう吹っ飛ぶかわからないモンスターマシンを車の動きに合わせて自分がそれを支えるよう制御するーーー。
事実、危なげな所があるが初めて運転するブラックバードは決定的な破錠をしていなかった。

ブラックバードを苦労しながら操る歌織を見て島は一つの決断をする・・・。

病院の駐車場に戻って来た９６４とＲ３２ＧＴ―Ｒ。
１時間経つのはあっという間だった。
「それで・・・どうでしたか？」
「ああ。久しぶりに熱くなれた。懐かしかった・・・」
「歌織さん。僕の答えを言っていいかい？」
「僕はもう走らないと決めていた。だが、やはり走ってないで言うのと、走ってから言うのでは決断の重さは全然違った」
「でも、僕はもう歳だ。現役の首都高ランナーにはもう及ばない」
事実、島の年齢はもう４０歳を超えているのである。
「だが、歌織さん。君は若い。そして君はセンスがある。僕以外に９６４を運転した人間はほとんどいない。でも君はその中でも一番僕の車を操れていた」
「僕はもう時間があまりない。だが君なら時間はたくさんある。僕の９６４を僕の代わりに乗って欲しいんだ」
島の口から出た言葉に衝撃を隠せない一同。
「無理を言っているのは承知だ。でも君は僕が出来なかった事をやれる。そう感じたんだ」
「えぇ～!?」
「そんな言葉出るなんて思わなかった！」
「乗ります」
「「え？」」
「先生が楽しそうに走ってる姿、心の奥から楽しそうでしたもん。先生が楽しく打ち込める事を終わらせないために私に託してるんだって、思ったんです」
「先生が本当にかけがえのない物を捨てたくないってわかりますもの」
「いいのかい？」
「はい。私も先生が出来なかった事を私が成し遂げたいって思って

！」
「長く乗って欲しい。後は頼んだよ。『音速の貴婦人』」
「」
こうして、銀色の黒（ブラックバード）鳥を島達也に託されたのが「音速の貴婦人」こと桜守歌織だ。
譲り受けたのは良いものの車検切れ、しかも車検取得不可。
歌織の父がレーシングチームの知り合いに相談してプランを立てる。
結果、パイプフレーム＋カーボン外装のマシンを結局パーツ流用でボディを新造する事に。
驚異的なスピードでボディの新造、及びセッティングが進められた・・・。
３週間後。
新生ブラックバードが完成する。
銀色のシルエットという点は異なるが、外装やエンジンのスペックはオリジナルを踏襲。また、セッティングされ直した事で本来のスペックを発揮できるようになり、最大７００馬力を発揮可能になった。封印が解かれたような物である。
新生ブラックバードのエンジン初始動。
島に託されたこのマシン。背負う物は重い。
空冷エンジンが咆哮を上げるーーー。

首都高某所。
満月が空に映る。
「～♪」
古い唄を口ずさみながら、少女は満月を見上げる。
蒼いＺ（スピードの化身）を横目に黄色い月に争った車を重ねる。
紅いマシンと銀色のマシン。
再び会うのはいつか。明日か。明後日か。
また出会う事を願って少女は走り続ける。
この悪魔と呼ばれる車と共に。

五章　月の下の悪魔

蒼いZが満月をバックに闇の中の首都高を走る。
探し求める。紅い車と銀色の車を。
この車で走る意味がある相手。少女は走り続ける。

眩しい太陽が照らす道。
「レイナさんから聞いた店・・・ココだよね？」
「名前はあってますよね・・・」
「えぇー・・・。自転車屋だよここ・・・」
美世と蓮はこの間の撮影の時にレイナから聞いた店に来ていた。
だが、どう見てもただの自転車屋だ。
「レイナさんがウソつくとは思えないし・・・」
すると、店の中から男が出てきた。
「何だお前ら・・・？」
男の顔には大きな傷跡があった。驚く二人に質問する。
「・・・んで何の用だ？」
「あたし達『地獄のチューナー』を探しているんです。あたしの仕事の先輩が教えてくれたんです。『地獄のチューナー』は自転車屋をやっているって」
「・・・冷やかしなら帰んな」
「どうしても知らないふりするんですか？『悪魔のZ』は今も走ってますよ」
「・・・！」
男の表情に僅かだが変化が生じる。
「『悪魔』を作ったのはあなたでしょう、北見淳さん」
「・・・アイドルってヤツか。ったく、アイドルは知りたがりだナ」
北見淳と呼ばれた男が答える。
「アイドルって、何故わかるんですか」
「アイドルってそういうオーラがあるんだヨ。俺の知った顔に似ているんだ・・・」

「北見さんも知ってる人だと思いますよ。この店とあなたの事を教えてくれた人」
「くくく・・・。わかったぜ」
「レイナだろ・・・。あいつは昔ここに来たんだよ。ＧＴ―Ｒを速くしてくれって。ま、断ったけどな」
「まぁ、断った理由はお前らなら答えれるだろうけどな」

「北見さんは何故『悪魔のＺ』を作ったんですか？」
　悪魔のＺ。美世の、いや、首都高ランナーの目標（ターゲット）になり続けたマシン。
　意思を持つように走り、認められた者以外が乗ると事故を起こす呪われた車とも言われた。
「・・・そうだな。ただ速く走るための車であるハズだった。だがＺは本来の目的すらも置いていく様になったんだ・・・」
「気がつけば、神のような扱いになっていた。スピードの化身、希望と呼ばれた。ただの車にそこまで言わせる程の『なにか』が俺がＺに出会う以前、Ｚが生まれた時からあったんだろうな・・・」
「そういうのありますよね」
「俺は数え切れない程エンジンを組み、たくさんの人の人生を狂わせた・・・。ある時は二度と帰らず、またある時は長い闘病生活を送った。俺のせいで人生を狂わされた者達を俺は忘れていない。忘れられないんだ・・・」
「人生が狂わされた・・・」
　未来がない男の事が重なった蓮。
「俺はもうチューニングをしていない。Ｚのチューニングもな。チューニングをやめて早２０年か。その間もＺは走り続けた」
　北見は今年で６１歳。悪魔のパートナーと黒鳥を駆る男が北見の元を離れて１０年以上が経った。
「俺はもう歳だ。俺の親父は６１で死んだ。俺も親父が死んだ歳になった。俺は自分で人生の終わりが６１だと決めてる。もしそれよりも長く生きれたらそれはおまけだ。だがな・・・」

「いつ死んでも、俺のせいで人生を狂わされた者達と地獄で共に過ごすってのは変わらないんだろうさ・・・」
北見の独白に耳を傾ける美世と蓮。
「俺は死ぬまであのZを見届けたい。それがあのZを作った者のケジメだと思うんだよ・・・。でももう体が長くない。はは、昔見たテスタロッサに乗ったカメラマンみたいな事言うようになっちまったな・・・」
「お前達は、まだ若い。俺の代わりにあのZを見届けてくれないか・・・？」
「もちろんです。だってあのZを目指してるんですから」
「くく・・・。言ったな。なら、あのZより速いって証明して見せろ」
「はい！」
二人が行った後、北見は呟く。
「今の時代にスピードを求めるか・・・。今はもう昔の様な事は出来ない。それでも、目指す物は変わらないか・・・」
「アイツらは悪魔を目指すだけでは終わらねぇ。それ以上になるべき存在だ・・・」
そしてこの場にいない悪魔（ア）のパートナー（キ）（オ）に呼びかける。
「お前はずっと周りを変えてきた奴だ。今お前はいない。だがお前の様に周りを変えようとしてる奴がいる・・・。そしてZを狙ってる。お前はそれで終わったのかい」

その日の夜、環状線を流れる車達をすり抜けていく車があった。
「まだまださ・・・。こんなものじゃないさ！」
黒いＣＴ９Ａ（ランサーエボリューションⅨ）が突き抜けて行く。
エボⅨを駆る少女の名は「白瀬咲耶」。モデルをやっている高校生の少女。
彼女がアイドルになるのは後の話。
モデルをしている中で、どうしても「不満」があった。何かが大きく変わる事がないかと探していた。
ちなみに先程まで立て続けにバトルをしていた。結果７連勝して

いた。
「どうかな・・・あの車は」
「おや・・・。戦いたいのですか?この車と」
挑まれている以上、引き下がるのも癪だ。
「貴方にとってこの車が相手に足るか・・・」
少女は後ろのエボⅨのドライバーに問いかけるかの様に呟く。
「行きましょうか・・・」
バトル開始。少女の駆る「悪魔」は加速していく。
「速い・・・・!なるほど、レベルが遥かに違うようだね・・・・!」
速すぎる。今までバトルしてきた相手とは比較にならない速さだ。
咲耶のエボⅨは確実に離されつつあった。
「・・・!?」
咲耶は前を走る車から「オーラ」が出てるのがわかった。妖しさが溢れるオーラが見えた瞬間、咲耶は冷や汗が出るのを感じた。
「そうか・・・。私は最初から勝ち目が無かったのか」
一気に戦意が消えていくのを感じる。ここまでか。
アクセルを抜く。ブローオフバルブが抜けた音が響いた・・・。

「あの車のドライバーはこの車はどう映ったのか・・・」
この車と並ぶ相手が少ない。この「悪魔」と並んだ相手はあの紅い車と銀色の車だけだ。
早くまた戦いたい。それだけ考えている。
後ろから眩しい光が車内を明るく照らす。また戦う相手が現れたみたいだ。
だが、今までの相手とは違う。待ち望んでいた車だ。
「また・・・会えましたね」

「会えたよ悪魔のZ!」
美世のGT―Rが悪魔のZに張り付く。この間は相手にならなかったが今度は違う。
「今度こそ、前を走るから!」

続いてロータリーサウンドが響く。
「あの車、あの時見た・・・」
蓮のＦＤ３Ｓが美世のＧＴ―Ｒに続く。
美世にとっては２回目、蓮は初めて戦う相手。伝説のマシンに挑む。
新環状から湾岸へ３台は走る。
湾岸ではＺとＧＴ―Ｒはほぼ互角。蓮のＦＤはパワー差から湾岸では少し置いていかれる。
「ーーーーっ！前に出れない・・・」
美世はＺの前に出れそうで出れない状態だった。蓮のＦＤはＺとＧＴ―Ｒの少し後ろを走っている。その距離は約６０ｍ。
「ダメだ・・・。パワーがまるで足りない・・・！」
６００馬力はないとまず勝負にならない。美世のＲ３４と悪魔のＺとのバトルに参加出来そうにないのだ。
膠着状態のまま、湾岸線を駆け抜ける。
「あの車は・・・」
美世がある１台の車を見つける。銀色の機影。
「・・・ブラックバード」
銀色の黒（ブラックバード）鳥が前を走っていた。
「見つけた・・・。原田ちゃんの車と原田ちゃんのプロデューサーさんの車ね」
歌織が呟く。臨戦態勢で待っていたのだ。

ブラックバードを加え走る美世達。
新生ブラックバードを駆る歌織はブラックバードを自由自在に操っていた。
「点と点を繋ぐワープみたいな走り・・・！」
異次元の動きをするブラックバードに驚愕を隠せない美世。
島が乗っていた時のブラックバードその物の動き。歌織はブラックバード完成後、毎日の様に首都高通いをしていたのである。
Ｚはブラックバードと並走。ドライバー（歌織）を見る少女。

「上手いですね。桜守歌織」
Ｚの少女を見つめ返す歌織。
「上手く走らせてるのが羨ましいわ・・・」
１時間後、八重洲線へ。
蓮のＦＤはリタイア。負担が響き、Ｅｇ（エンジン）をやるワケに行かず、蓮は追いかけるのを断念。
「また、走りたいな・・・」
残ったのは美世のＲ３４と歌織の９６４ことブラックバード、そして悪魔のＺの３台だ。
「踏み切る・・・っ！持ちこたえてＧＴ―Ｒ！」
ここで美世が勝負に出た。２車線になった道でＺと並ぶ。歌織は物理的に並走不可になった状況のため退く。
この状態にまず持ち込む。そして奥の手（ＮＯＳ）を使う。
シリンダーブロックにＮＯＳ噴射が行われ、エンジンの出力が一時的に上昇。この間のみ７００馬力に迫るパワーでＺに勝負する。
「速い・・・。やりますね」
Ｚも負けじと加速。Ｒ３４に並ぶ。道幅が狭い八重洲でサイドバイサイド。２００ｋｍオーバーでのサイドバイサイドは狂気の沙汰でしかない。
恐怖を上回るハイテンションだけでアクセルを踏み続ける。
「・・・！」
ガッシャと音がした。ボディとボディが接触する音だ。
それでも尚アクセルは緩めない。前に出るーーー。
その時Ｚから嫌な音が聞こえた。直後Ｚが失速。
「クラッチがやられたみたいね・・・」
クラッチトラブルで失速したＺを横目に美世のＲは降りた。次のＰ（パーキングエリア）Ａで待っているという意味だ。
歌織の９６４はＺに並びジェスチャー。
「ＰＡで待ってる」という意味の手。少女はそれを確認する。
「なんて事・・・。残念でしたね・・・」

パーキングエリアで3台が並ぶ。
美世のＲ３４は左リアフェンダーとウイングが損傷していた。
Ｚも右リアフェンダーと運転席側ドアに傷があった。
歌織の９６４は傷ひとつない。
それぞれのマシンを降りる３人。美世はＺから降りた人物に驚く。
「ええ～!?四条貴音ちゃん!?」
四条貴音。彼女は７６５プロのトップアイドルだ。かつて９６１プロに所属していた。後に７６５プロ入りをした過去がある。現在は７６５プロの先輩アイドルとして劇場（シアター）のアイドル達の良き先輩として活躍している。歌織も年齢こそ貴音より上だが、アイドルとしては貴音が先輩なのである。
「貴女は・・・」
美世を知らない貴音に歌織が説明する。
「原田美世ちゃんよ」
貴音が美世達口を開く。
「原田美世。貴女の車は素晴らしいです。そして貴女も」
「いきなり呼び捨て・・・」
「気にしないで原田ちゃん。貴音ちゃんは相手呼ぶ時はこうだから」
「・・・まぁいいけど。あたし褒められてる?」
「ええ。貴女はこの車と対等に走ったのですから」
「この車と一緒に走った車、そしてどらいばぁが桜守歌織と貴女だけでしたから」
「たぶん、悪魔のＺ（この車）と互角に走ったのは私と原田ちゃんだけだったって言ってると思うの」
「・・・え?つまりあたしと歌織さんだけなの?」
「後、黄色い車の彼もです」
「蓮君もかー」
「原田ちゃんのプロデューサーさん?」
「そうです。蓮君降りたけど」
「彼も素晴らしい走りをしておりました」
「貴音ちゃん。ちょっとだけＺを見ていい?多分クラッチ壊れてるで

しょ」
「良いのですか？私は車に詳しくなくて・・・」
「いいよいいよ。あたし前からこのZが気になっててねー。自分の手でいじってみたいと思ってたから」
「ではお願いします。原田美世」
Zの応急修理をしながら美世が貴音に質問する。
「貴音ちゃんはこのZをどこで見つけたの？」
そう。Zをどこで見つけたのか。前にZに乗っていたオーナー（アキオ）がZを手放した理由はともかく、どこに置いていたのかが美世は知りたかった。
「あれは『アイドルヒーローズ』の撮影の時でした」
「あー！小さい子達が見てた！」
「撮影の途中、倉庫に変な車があると聞いたのです」

数ヶ月前。
貴音や劇場（シアター）のアイドル達は人気番組『アイドルヒーローズ』の撮影のため、ある港に来ていた。
シーン撮影のため、倉庫の中の物を運び出す作業の時の事だった。
スタッフが車があると言うのだ。プロデューサー達と倉庫に向かうと確かに車があった。だが、ボロボロ。ナンバープレートが着いていたので、持ち主を調べて貰ったが、持ち主に電話が繋がらない。だが、詳しく調べた所、車は「売り物」として置かれていた物だという。この車を売り物として持っている人に電話で聞く。
何故、倉庫にあるか聞いた所、その車の持ち主が車を手放しに来た際、「この車を長く生かして欲しい」と言ったらしい。だが、改造車、しかも修復歴ありと商品にするにはあまりにも価値が低かった。実際、売れなかった。その為処分しようとしたが、オーナーが言っていた事もあり、倉庫に眠らせていたという。
とにかく車をどうするかプロデューサーやスタッフが相談し合っていた。その間アイドル達は車に興味津々。
「すごい古い車だねー」

「なんて車かな?」
　そんな事言ってるアイドル達だが貴音だけは車から見える「オーラ」に驚いていた。
「なんて・・・面妖な。この車は物の怪なのですか」
「えっ?」
「貴音さん何言ってんですか?」
　貴音の発言にポカンとするアイドル達。
　貴音が何か言ってもよく分からない事なのはいつもの事だ。
　だが、貴音本人は真面目な話をしている。
「この車は物の怪ですか?」
「物の怪じゃないですよ・・・。ただの車ですよ」
「この車から何も見えないのですか!?」
「何も見えません!」
　百合子が貴音に質問する。
「この車が何かすごいって思うんですか?」
「ええ。過去に何かがあった・・・。そう感じます」
　貴音の言葉に顔を見合わせるアイドル達。ボロボロのこの車は確かに何かがあってこうなってる様に思える。
「プロデューサー。この車を私にください」
「えっ!?」
　その場の全員が貴音に視線を向ける。
「この車は物の怪です。でも裏を返せば生きているとも取れます。この車を持っていた持ち主が『長く生かして欲しい』と言ったのでしょう。この物の怪の様な車を少しでも生かしたいと思ったのです」
「貴音・・・。考え直したらどうだ?」
「悪いですが、考えを変えるつもりは一切ございません」
「・・・わかったよ貴音」
　プロデューサーが根負けする。そしてZの売り手に電話をかけ話を進める。
　結果、タダで譲ってもらえることになった。その代わり、何かあっても責任は取れないと。

その言葉を不審に思ったプロデューサーが聞く。帰ってきた答えはこの車は過去に次々オーナーを変えたという話。
「貴音、本当にやめた方がいい！」
「構いません。この車しか私はありません」

結局、Ｚは貴音の手に渡った。
Ｚを持ったのはいいが、整備出来ない。その為、伊織に相談した。結局、水瀬家の権力を使い、Ｚを整備する事になった。
伊織が貴音の便利人みたいな事になってるのはいつもの事だ。伊織ちゃん涙目。
一ヶ月後、Ｚは復活を遂げた。妖しい魅力を持った蒼いボディに魅せられた貴音は走り出した。貴音はＺの魔力に染まり切っていた。

語り終えた貴音はラーメンを食べていた。
「やはりらぁめんは美味しいですね」
「どっから出したの・・・」
美世の質問を無視し、今度は貴音が美世に聞く。
「原田美世。貴女はこの車を何の為に追うのですか」
「うーん・・・。理由はふたつかな」
「理由・・・？」
「ひとつは約束。この車を作った人との約束なんだ」
「ふたつめはやっぱり速さを証明するため！」
「約束ですか・・・。この車に乗っていた前の持ち主はこの車をどう見てたんでしょうね」
「どうだろうね・・・。よし、応急修理出来たよー」
応急修理を終えた美世がＺの下から出てくる。
「ありがとうございました、原田美世」

Ｚとのバトルを終えて家に向かう美世。
あの時あたしは勝ったとは思っていない。本気の勝負でトラブルで勝敗が決まることはよくある。でも、勝負としては負けていた。

「次はちゃんと勝つからね」

Ｚを走らせる貴音。

不本意な形で終わった勝負。だが、このＺ(車)で再び戦えてよかったと思う。そしてこの車に対等な黄色い車が現れた。また相手が増えた。

「またいつか走れるのを楽しみにしております」

９６４を走らせている歌織。

美世のＧＴ―Ｒと貴音のＺ、そして蓮のＲＸ―７とのバトルに置いていかれた自分。もしこの車で走っていた現役の頃の島と会ったら今の自分はあまりにもブラックバードに相応しくない。だが、こんな自分に愛機を託した島の思いを無駄にする訳には行かない。

「今度は退かないから・・・！」

大黒ふ頭にいた蓮。

峠上がりの自分があそこまでＺやブラックバードに着いていけたのが奇跡だ。だが、結果はリタイア。あまりにも足りない物が大きい。パワーも、そしてこの首都高への熟練度も。だが、美世はこんな自分と一緒に走るのを楽しんでいた。次は負けないように。

「次は勝ちたいですよ。美世さん、貴音さん、歌織さん」

ぶつかり合った４人の首都高ランナー。

それぞれの思いを胸に、再び戦う日を待つ。

全てはこの首都高(ステージ)のために・・・。

六章　覚醒（ブレイク）する紅いＲ

６月のある日。
蓮は先輩プロデューサーである武内Ｐと共に、あるビルの会議室に来ていた。
そこには、お馴染みの７６５プロの赤羽根Ｐ、８７６プロの社長である石川実など、それぞれのプロダクションの主要人物達が待っていた。
「凄いですね・・・」
「蓮さんは初めてでしょう。こうやってプロダクションのプロデューサー達が集まってるのが」
「はい・・・」
これから行われるのは「７６５プロ」「８７６プロ」「３４６プロ」３つのプロダクション合同でのドームライブの打ち合わせなのだ。１２月に計画されている大きなライブ。
７６５プロはお馴染み天海春香達「７６５ＰＲＯＡＬＬＳＴＡＲＳ」通称「７６５ＡＳ」に加えて「３９プロジェクト」のアイドル達がメンバー。
８７６プロは伝説のアイドル「日高舞」の娘である日高愛、元人気ネットアイドルとして活動していた水谷絵理、７６５ＡＳのメンバーの「秋月律子」のいとこである秋月涼の３人。
だが、３４６プロはメンバー選定が終わっていないという状態であった。何しろ人数が多い。
「『シンデレラプロジェクト』は決まっているのですが・・・。あと３つほどユニットで出せればと・・・」
武内Ｐが説明していく。『シンデレラプロジェクト』の１期生の時からプロデューサーをしているだけあり、このような場に慣れている。
結局、決定案を３日後に出す事になった。
武内Ｐが蓮に言う。
「蓮さん。あなたがユニットの選定をしてください」

「わかりました！」
とはいえ、ユニットの選定は大変である。
出すユニットは３つ。『シンデレラプロジェクト』のアイドルが入るユニットも出すとは聞いたが、悩ましい所だ。
だが、蓮は必ず美世を出してやりたいと思っていた。
ステージに立つ彼女の姿が亡きプロデューサーに届くように。
そう考え、蓮はメンバー表を見ていた・・・。

「まいったな・・・」
現在、蓮は完全に作業が止まってた。２つは何とか決めたが、肝心の美世のユニットがまだ決まってなかった。
決まったユニットは「フェアリーテイル＊マイテイル」（藤原肇、小日向美穂）と「ＢＲＩＧＨＴ：ＬＩＧＨＴＳ」（鷺沢文香、橘ありす）。
どうしようかと悩む蓮。体を伸ばそうと席を立った蓮。その視界に二人のアイドルが映る。
「あっ」
決まった。そうと決まったら武内Ｐの元に行き、確認をとる。結果、無事に案は通り、３４６プロからのメンバーは決まった。その日の内に連絡を送った。これでライブに出るアイドルは決まった。
３４６プロのメンバーは『シンデレラプロジェクト』に加えて「フェアリーテイル＊マイテイル」と「ＢＲＩＧＨＴ：ＬＩＧＨＴＳ」、そして「ウィンター・Ｆ・ドライバーズ」と決まった。「ウィンター・Ｆ・ドライバーズ」は鷹富士茄子、姫川友紀、そして美世の３人でのユニットだ。
蓮が来る前のプロデューサーが生きていた時に結成されたユニット。だが、美世が新人というのもあり、しばらくソロで活動していた。ここでこのユニットを起用する事になった。
夕方、アイドル達を集めてライブメンバーの発表を行う。
「まず、シンデレラプロジェクトの皆さん！」
「次に肇さんと美穂ちゃんの二人で『フェアリーテイル＊マイテイル』！文香さんとありすちゃんで『ＢＲＩＧＨＴ：ＬＩＧＨＴＳ』！」

「最後に茄子さん、友紀さん、美世さんで『ウィンター・F・ドライバーズ』！」
「本番に向けてのレッスンを頑張ってください！僕からは以上です！」
次の日から本格的なレッスンが始まった。
ライブに出るアイドル達はいつもよりも多いレッスンに取り組んでいた。その中で1人、気合いの入り方が違うアイドルがいた。美世だ。
「初めてのライブ・・・！フルパワーでやるっ！」
他のアイドル達とレッスンしつつも、個人で空き時間に筋トレをしていた。自分の荷物の中には筋トレ用のダンベルやタオルなど、他のアイドル達とは明らかに異なる物だらけ。
「凄すぎだよ・・・」
「でも、熱心って事じゃないですか？私、美世ちゃんの姿勢、いいと思いますよ」
茄子と友紀が呆れと関心を口にする。
「だって二人はライブ出た事あるじゃない？あたしは初めてだから！二人に負けないライブにしたい！」
美世の熱意がひしひしと伝わる。
3週間後のある日、美世は完全なオフを貰った。美世はレッスンに加えて工場での仕事もしている。当然、働いてる時間はとんでもない量だ。見かねた武内Pに休まされたのである。親方にも休んでろと言われたからには大人しく休む。
オフとは言え、何も無いとなると暇だ。久しぶりにどこかにドライブしようにも最近ガソリンの価格が高く、変にガソリンを使うわけには行かなかった。
「うー・・・。暇だよ～」
愛機GT―Rも整備したばかりでコンディション良好。やる事がない。
しょうがないので自主練をして過ごした。

次の日、レッスンをしていた美世に1本の電話が届く。
相手はなんとレイナ。突然電話をかけてきたレイナに驚きながら電話に出る。
「ごめんねー、美世ちゃん」
「レイナさん、どうしたんですか？」
「美世ちゃん最近首都高行ってる？」
「いえ・・・。最近忙しくて・・・」
「よかった・・・」
「なんかあったんですか？」
「実はね、最近首都高で妙な集団がいるの。チャージャーに乗ってるんだけど・・・複数で囲んで事故らせるの・・・」
「えっ!?」
「私も見たわ・・・。前を走ってたインプを小突いてね・・・。幸いインプのドライバーは無事だったけど、出会ったら危ないわ。気をつけてね」
レイナの話の内容に驚く美世。なんて事をするんだ。
でも、今はレッスンが大事だ。意識を切り替えダンスレッスンに取り組む。

「美世さん、お疲れ様です」
「蓮君かー。そっちはどうなの？」
「こっちも大変です。曲の選択や演出の打ち合わせで頭がパンクしそうです・・・」
「でも、一番大変なのは美世さん達アイドルです。僕がこんな所で弱音を吐いたら皆さんが心配してしまう・・・。アイドルに心配される様な事になったらプロデューサー失格ですから」
「ま、どっちもそれぞれ大変かー」
「美世さんこれから上がりですか？」
「うん。蓮君も？」
「はい。武内さんが後はやるって」
「久しぶりに行ってみる？」

「ええ。行きましょうか」
「おや、原田美世とプロデューサーの・・・」
「小日向蓮です。貴音さん」
「あら、蓮君と原田ちゃん」
いつものパーキングエリアで貴音と歌織と出会った蓮と美世。
聞いてみれば、美世達と同じく、レッスンの帰りだったそうだ。
歌織が聞いてくる。
「これから流そうと思ってたんですけどどうですか？」
「いいですね。僕達も同じ目的でした」
パーキングエリアを後にするＺと９６４、そしてＲ３４とＦＤ。４台は湾岸方面に向かう。
「あれ？蓮君のＦＤなにか変わった？動きが違うっていうか・・・」
一般車をすり抜ける蓮のＦＤの動きが前に一緒に走った時の動きと違う事に気づいた美世。
若干、アンダー気味の挙動。だが、旋回後の安定感は前と比べると向上しているのである。
「蓮君のＦＤあのままでもいいはずだけど・・・」
美世の疑問が答えになるのは次の瞬間だった。
蓮のＦＤの後ろに黒い車が見えた。その黒い車こそ、レイナが言っていたチャージャーだったのだ。
「うそ・・・！まずい！」
蓮のＦＤを狙ってるようだ。このままでは蓮が危ない。美世はペースダウンしチャージャーに近づく。蓮にハンドサインで「前に出て」と伝えて蓮のＦＤを前に出す。
自分が囮になり、蓮達を逃がそうとする。下手すれば自分が危ない。
「来るなら来たら？」そう言うかの様にＲ３４はチャージャーを引っ張る。
だが、チャージャーは美世のＲ３４を軽く追い抜いた。６００馬力近い美世のＲ３４を置いて行けるほどの大出力持ち。こうなると蓮達の元にチャージャーが追いつくのは時間の問題。が、ここで美世は

もう2台車を見る。
「まだいた・・・!?」
なんと、先行してる蓮達の前に美世の前を走る黒いチャージャーと全く同じチャージャーがいた。しかも2台。蓮だけでなく、貴音や歌織もピンチだ。
「どうしたら・・・!」
美世はステアリングに付けられたNOS噴射スイッチを押し込む。NOSが噴射され、瞬間的にパワーを引き上げてチャージャーに並ぶ。だが、チャージャーがレーンチェンジ。美世のR34にぶつかりそうになる。ギリギリ回避し、美世は蓮達の元に急ぐ。

「このままじゃ・・・!」
歌織が焦る。後ろのチャージャー(黒い車)に追いつかれるのはもちろんだが、前の2台もいる。どうにかして逃げないと危ない。
すると、蓮のFDが歌織の前に現れる。前の2台を追い抜こうとしてる。蓮は歌織達からチャージャーを離そうとしてるのだ。だが、パワーが違う。FDはチャージャーに食いつけない。
その時、チャージャーが下がり蓮のFDに接触した。超高速域で接触され、蓮のFDは体勢が崩れる。
「あ・・・」
蓮のFDはコントロール不能になり、スピン。そのまま150m以上移動した。
けたたましいスキール音を響かせながらようやくFDは停止。奇跡的に、FDは接触した時の傷以外に損害はなかった。
「はぁ・・・!はーっ」
蓮は死を覚悟した。300kmクラスのスピードでの破錠は即クラッシュに繋がる。こうして今自分が生きてるのが奇跡だった。蓮はその後、離脱した。
スピンするFDを見て美世は背筋に悪寒が走る。蓮が死ぬーーー。
いやだ。もう居なくならないでよ・・・。
相当な距離を移動したFDが止まり、ほぼ無傷で健在だったのを確

認して一安心した美世。その瞬間、美世は目の前のチャージャーに怒りを覚える。
「許さない・・・っ！」
　同時にＲ３４を加速させる。このままだと貴音と歌織も・・・。
　最悪の結果を避けるため、チャージャーに向かって行く。
「おいおい、正気か？この８００馬力のチャージャーにケンカを売るのか？」
「いいから、やるぞ」
「へいへい！」
　チャージャーを運転する男達は後ろの紅いＲ３４が迫るのを眺めていた。このチャージャーにケンカを売るとはいい度胸だ。
「カブせるぞーーっ」
　美世の視界は黒いチャージャーのボディで埋まる。ぶつかる・・・。
　そうぼんやり思いながら美世は考えていた。なんでこうなった。なぜこうしてくる。なぜ向かってくる。なぜ・・・。
「なぜ蓮君を殺そうとした・・・？」
　その瞬間、美世の脳内にはガラスが砕けるようなイメージが浮かぶ。パリンと音がして、割れたガラスが散らばる・・・。
　その時美世に変化が起きた。美世の瞳から光が消える。そして、美世の感じる物が変わって見える。まるで未来が見えるーーー。
　美世はアクセルを踏み込む。目の前は被せてきたチャージャー。だが美世は一歩も引かず、むしろ突っ込んでいった。突っ込んできたＲ３４に怯み、男達は回避行動を取る。だが、バラバラに動いたため、お互いが接触。クラッシュだ。
　クラッシュし道を塞ごうとする、チャージャーを避ける美世。１台目のチャージャーを回避。だが、かなりのスピードが出てる。その途端にリアタイヤが滑り出す。さっきの蓮のＦＤのようになる。歌織達はそう思った。
　だが、美世は最小限の修正だけで車をスライドさせ続ける。そして残った２台を、リアウイングが壁に接触するギリギリまで近づいてドリフトで回避したのだ。

「・・・!?」
「なにあれ・・・」
歌織と貴音もチャージャーを避け、この場を後にした・・・。

この後、美世は歌織達に質問されるが何も答えれなかった。だが、美世自身もあの感覚は初めて感じる物であった。
次の日、この事を蓮に話すが蓮もどういう事なのか知りたそうだった。あれは一体何だ。そこに1人のアイドルが現れる。
「にゃはー、ガソリンの匂いがするー」
「お、志希ちゃん。・・・あたしそんなガソリンの匂いする?」
一ノ瀬志希。海外に留学するも、レベルの低さから「つまんない」の一言で帰国し高校に通う本人は「ふつーのＪＫ」と言う天才少女。
志希なら何かわかるかもと思い、美世はその時の事を話した。
「・・・なるほどー。それはいわゆる特殊能力って言った方がいいかもね」
「特殊能力?」
「あたしが海外にいた時に聞いたけどね。人の感情・・・。簡単に言うと『怒り』や『悲しみ』が高まると『ソレ』が現れるって」
言われてみると、確かにあの時美世は蓮を殺そうとしたチャージャーの男達に対しての『怒り』があった。
「『ソレ』が発現すると脳への情報伝達を行う組織が変化するんだー。その影響で情報処理能力や判断速度、空間認識能力がフツーの時より遥かに上がるんだってー!」
「えぇ・・・?」
「でも、『ソレ』は本当にあるのか疑問視されてたんだー。何しろ、あまりにも『ソレ』が起きなかったからね。実験中『ソレ』らしき兆候はあったけど、あまりにも非現実的な事言ってたからね。信じられなかったんだよ。あたしも信じてなかったし!」
「何で志希ちゃんは『ソレ』を学ばなかったの?」
「あたしはあくまで薬品とかに詳しいだけだよ。ヒトの体の仕組みとか知っても使えないしー。薬品は楽しいからね!」

すっごいいい笑顔で薬品が楽しいと言う志希に軽く引きながら美世は聞く。
「つまり、あたしは特殊能力を持ってる・・・？」
「うーん、そーいう事じゃない？」
「なんて名前なの？『ソレ』って」
「実在するか怪しい物だから名前はついてなかったよ。あ！じゃー、あたしが名前つけていい!?」
「いいけど・・・」
「じゃあガラスが砕けるようなイメージって事で『ブレイク』！」
「そのままだなぁ・・・」
「それ以外何あるのさ？」
「・・・ないね」

クリスマスライブまで残り5ヶ月。覚醒（ブレイク）した美世はライブに向けてレッスンを続ける。

七章　悪魔のパートナー

クリスマスの合同ライブに向けて練習を重ねる３４６プロのアイドル達。そして、ライブの打ち合わせで毎日忙しいプロデューサー達。とにかく大変だ。

美世はたまにあるオフすら自主練に費やしていた。そのためＧＴ―Ｒに触る時間が目に見えて少なくなっていた。整備を親方にお願いし、練習をしているのだった。

「いった・・・。筋肉痛か・・・」

「無理しすぎじゃないのか？」

「まだまだ行けますよ」

「お前は頑張りすぎだって思ってないのか・・・」

親方にも言われる程、練習に打ち込む美世。首都高にはこの間の１件があってから行っていない。

「蓮君、少しは休んだらどうですか？」

「はい・・・。少し休ませてもらいます」

ちひろに聞かれ、休みをもらう蓮。ライブの演出などを考えるのも大変。入社してまだ半年にならない蓮。新人がここまでの仕事をやるのは普通はない。だが、今は人手が足りなかった。そのため、新人の蓮もここまでの事をやっていたのだ。

ちひろに作業を引き継ぎ、仮眠室に向かう。横になった途端、一気に睡魔が意識を持っていった。

こうして１週間が過ぎて蓮と美世はオフを取った。土日の２日間を休みに使う。蓮は首都高での走りに合わせるために、ＦＤをチューニングしていた。まずパワーアップ。６００馬力近くある美世のＲ３４に追いつけないのもあり、前から欲しくてようやく買ったＮＯＳを装着。次に、給排気系の変更。レース用の新型インテークマニホールドに変えた。排気系はより高性能品に変更。

そして、エンジンだ。１３Ｂを降ろし、パーツ変更。タービンはＴ

Ｄ０６を付けていたが、首都高でのパワー不足を感じ、より大きいタービンに変更する事にした。ワンサイズ大きいＴ７８に変更した。他にもいろいろ変更を行い、その日に作業を終わして蓮は寝た・・・。

美世は久しぶりにＲ３４で首都高を走ってた。環状線を流した後に横羽線へ。そこで美世は1台の青い車を見つける。

「Ｚ３４か・・・。ちょうど一緒に走りたかった！」

美世は先行してＺを引っ張る。Ｚも追いかけてきた。美世はＺとのバトルに突入する。

Ｚはとてもスムーズな動きで追いかけてきた。一般車を手馴れた動きで避けていく。Ｚからオーラが見えていた。

「すごい・・・！パワーはこっちが上なのにそれを感じさせないくらい上手い！」

羽田トンネルを抜け、フル加速する2台。Ｚは立ち上がりの加速でＲを凌駕していた。

「並ばれた・・・」

美世は戦意喪失。本気を「まだ」出してないＺの前に自分の技量では敵わないと直感的に判断したのだ。美世はＺから見えるオーラの前に完全に圧倒されていた。

Ｚのドライバーが左を指さす。次のパーキングエリアに入れと。美世もそれに従い、パーキングエリアに入る。

それぞれの車から降りる2人。美世はＺのドライバーの男を見る。Ｚに乗っていた男は言うとおっさんだった。美世は自分から自己紹介する。

「あたし、原田美世って言います！あなたは？」

「俺かい？俺は朝倉アキオだ」

「ーーーー!!」

朝倉アキオ。かつて、『悪魔のＺ』に乗っていた男。Ｚのパートナーとして、島達也など様々な相手とバトルを繰り返してきた伝説の男。悪魔のＺを降りたと聞いていたが、ここで会うとは。

「アキオさん。あなたは『悪魔のＺ』に乗っていたんですよね」

「懐かしいよ・・・。ああ、乗っていた」
「何故・・・Ｚを降りたんですか」
「俺はもう昔みたいに走れないんだ・・・」
　アキオはＺに乗り、何回もバトルを繰り返した。時代遅れのＳ３０ｚでランエボなど新型と戦い続け、それでも勝ってきた。だが、時代を越えて走るＺに対し、自分は老いていく。直せば長く走るＺと替えがきかない自分。だんだん、首都高をＺで走る事に意味を失いかけていた。だが、Ｚを自分ではなく若い誰かに乗ってもらえれば、Ｚは生き続ける。例え、Ｚに拒否されてもＺを愛する人はいる。
　そう信じて、自分はＺを降りた。誰かが自分の代わりにＺを生き続けさせてくれ。
「そのＺは・・・？」
「Ｚを降りても首都高への思いは消えなかった。・・・俺がＺに乗っていたのを思い出すために乗ってるんだ」
　ミッドナイトブルーのＺ３４のボディはＳ３０の魂が宿るようだった。アキオは美世に聞く。
「キミはなぜ首都高（ここ）を走る？」
「あたしはＺを追いかけるために。今も生きているＺを追うのが首都高ランナーだから」
「あと、北見さんとの約束だから」
「北見さんか・・・。元気かナ」
「昔と変わらなそうでしたけど」
「はは・・・。あの人は昔から無茶苦茶ヤる人だったさ」
　アキオの青いＺを追う美世のＲ３４。アキオは湾岸の走り方を美世に教える。
　３車線目一杯使い、コーナーを抜けるＺ。言ってるだけでは簡単そうに見えても、少しでもミスがあればコントロール不能。即クラッシュに繋がる。長年走り続けたベテランのアキオの動きは洗練された物だ。
「ただの基本をやってるだけなのに何故こうもスピードが違う・・・？」
　美世はコーナーを立ち上がるＺのスピードに着いていくのがやっ

とだった。こうして美世は数時間湾岸を走り続けたのだった。
「ありがとうございました」
「俺も久しぶりに熱くなった。もし、Ｚを見たらドライバーに伝えてくれないか？」
「Ｚは君のパートナーになってるかいってね」
「わかりました！アキオさんも元気で！」
「ああ。またいつか走ろう」
伝説の男朝倉アキオとの出会いを経験し、首都高へのモチベーションが戻る美世。美世はもうひとつの夢を思う・・・。

数日後、合同ライブのリハーサルが行われる。そこでは本番同様のプログラムで進む事になっていた。美世達「ウィンター・Ｆ・ドライバーズ」はなんと３４６プロでは最後だった。要するに大トリだ。
「すっごい、緊張する・・・！」
「美世はあれだけやってたじゃん！あれで緊張するはむしろすごいと思うよ」
「友紀ちゃん。美世ちゃんは初めてだって忘れてませんか・・・」
「そうだった・・・」
実際に曲を通して確認していく他のアイドル達。そしていよいよ美世達の番だ。
「ウィンター・Ｆ・ドライバーズ」がやるのは「お願い！シンデレラ」。美世がセンターを務める。曲が流れ出し美世は今までの練習を思い出して歌う。
「お願い！シンデレラーーー」

この後８７６プロのアイドル達の後に決められたアイドル達がそれぞれのプロダクション関係なく集い、最後に歌うという曲のリハーサルをしていた。
美世はリハーサルとはいえ、本番同様の練習でプレッシャーを感じて疲労困憊していた。

「美世ちゃんすごかったですよ～」
「あれだけ出来るなら大丈夫！」
「はは・・・、ありがとう・・・」
そこに蓮も来る。
「美世さんすごかったですよ！美世さんは人一倍頑張ってたんです！
その努力が形になってるんですから！」
「ありがと・・・」
この後、機材チェックなどが入りリハーサルは終了した。
美世は修正点を意識し再び練習に励む。

「黄色いＦＤ・・・。やっと見つけたぜ」
部下からの情報を聞いた男が笑う。あの時の復讐が果たせる。
「今度こそアイツを殺す・・・」
怪しい笑いを浮かべ、復讐の標的（ターゲット）の写真にナイフを突き立てる。
蓮達に危機が迫っていた。

八章　復讐、未来からの逃走

１１月１４日。
今日は美世の誕生日だ。アイドルになってから初めての誕生日。
美世は１年前と同じようにＧＴ―Ｒで実家に戻っていた。１年前とＧＴ―Ｒは全く違ったが。
「お帰り美世！」
「おお、お帰り。美世」
両親達に迎えられて、美世は家に入る。
「えへへ・・・。ただいま！」
「さ、上がりな！」

「美世、アイドルとして上手くやれてるか？」
「うん、来月は大きなライブがあってね、あたしソレに出る事になったの！」
「おお！」
「先輩達に負けないようにたくさん努力してきた！プロデューサーさんも褒めてくれたし！」
「そりゃあよかった。美世がそう言うとは、いいプロデューサーじゃないか」
「そうね・・・。美世が自信を持ってやっている事が嬉しいわ」
「だから、これからも美世をお願いします。プロデューサーさん」
美世の母がそう言った途端、奥の部屋の扉が開けられて蓮が出てきた。
「いいプロデューサーだなんて・・・。僕はまだまだ新人ですよ」
「え・・・ええー!?」
何故ここに蓮がいるんだ。美世の疑問を先回りして美世の父が答える。
「美世がお世話になってるプロデューサーを呼んだんだよ」
「あはは・・・。いきなり来てくれって言われた時は何事かと・・・」
家族が用意したサプライズに驚くしかない美世。

「でも・・・。ありがとう。父さん、母さん、蓮君」
ご飯を食べた後、プレゼントを渡す家族達。母は新しい財布、父は写真立て、弟はカバンを渡してくれた。
そして蓮はネックレスを渡してくれた。もう、嬉しさで胸がいっぱいだった。
「ありがとう・・・！」
そして家族に別れを告げる時に美世は言った。
「アイドル『原田美世』を見に来て！」
「見に行くよ。だから、頑張れ！美世！」

東京への帰り道の途中、パーキングエリアで休憩する２人。美世は心境を蓮に告げる。
「あたし・・・すごい嬉しかった。蓮君にも祝ってもらえて嬉しかったんだ。・・・蓮君には感謝してる。もしも、蓮君に会わなきゃあたしは変われなかったと思う」
「感謝ってそんな・・・。僕はただの新人プロデューサーなだけで・・・。まだまだ武内さんみたいなプロデューサーにはなれてないですよ」
「ふふ。本当に蓮君は謙虚な性格してるね」
美世は蓮との出会いで変わった。もしも、蓮が３４６プロにいなかったらプロデューサーの死を乗り越える事はできなかっただろう。
あたしは蓮君という人がいたからここまで来れたんだ。
蓮も美世に告げる。
「僕も美世さんに出会えて本当によかったと思います。もし、３４６プロにいなかったら僕は美穂ちゃんに会えていない・・・。そして、みんなに出会えなかっただろうから・・・。美世さんと会って、たくさんの人達と繋がった。そして僕も変わる事が出来た」
お互いの思いを告げ、２人は夢を語る。
「「レーサーを目指してる！」」
２人が目指した夢。
美世は家族を助ける為、カートをやめて自動車整備士を目指し、アイドルにもなった。

蓮はレーサーを目指したが1度自分を見失い、もう1つの約束(夢)を叶える為にプロデューサーとなった。
1度は諦めた夢をいつまでも追い続けるーーー。
結局は2人共似たもの同士だった。
お互いの夢を語って2人はそれぞれ愛車に乗り込む。パーキングエリアから黄色いFD3Sと紅いBNR34が出発。事務所に向かい、闇の中の道を進む。

こうしてクリスマスライブ直前まで2人は努力し続けた。美世は振り付けのキレをさらに引き上げた。その動きのキレはマスターレーナーが驚く程であった。初めてのステージで輝く自分を亡きプロデューサーに届けたい。その一心でレッスンに取り組んだ・・・。
蓮は346プロのアイドル達の宣伝に走っていた。各地を飛び回り、ライブの宣伝をしていた。一日中全国を移動した次の日には、様々な会社を回ってライブのスポンサーを見つける。蓮の熱意に負けて、スポンサーになる会社もあった。蓮の働きぶりは常務が「もう休め」と言う程。だが蓮は仕事の手を緩めることはない。アイドル達が精一杯輝く舞台(ステージ)を作り出すのはプロデューサーである自分だ。プロデューサーが手を緩めたら、アイドル達が輝けないから。だから自分も全力でやる。蓮は本来数人がかりでやる作業をたった1人でわずか3日で終わらせたのだった・・・。

12月。
蓮は美穂の誕生日の為、美穂の家にいた。美穂の誕生日の為に今まで取ってなかったオフを取ったのだ。蓮は誕生日など、人の行事にはちゃんと出るのである。
「わぁ・・・!可愛いですね!」
蓮が美穂に送った物は、シロクマのキーホルダー。美穂が前の写真撮影の時に気に入っていたのを見て買った物だ。
「付けてみていいですか!?」

「もちろん！」
嬉しそうに美穂はキーホルダーを自分の携帯に付ける。携帯に付いているシロクマのキーホルダーが可愛らしい。
「えへへ・・・。ありがとうございますっ！」
「どういたしまして。美穂ちゃんが喜んでくれたら僕も嬉しいよ」

「美穂ちゃん、今回のライブに対しての意気込みは？」
「そうですね・・・。蓮さんが来てから初めてのライブなので・・・。あの時の『約束』を果たしたいです！」
「うん・・・。守るよ。美穂ちゃん」
数年前に２人が交わした約束。
ステージに立つ美穂を蓮は見届ける。１度自分を見失った蓮が立ち直ったのもこの約束があったから。約束を守るために蓮はプロデューサーになった。アイドルになった美穂を見届けられる最高の場所だ。２人が交わした「約束」を果たす日まであと９日であった。暗闇の中に降る雪が、今までの記憶のように降っては消えた。

最終調整も終えライブ前日。
美世と美穂、そして蓮は互いの意気込みを語る。
「最高の舞台（ステージ）で輝いてみせる！」
「『約束』を果たしたい！」
「『約束』を守る！」
こうして明日本番に向けて気合いを入れた３人だった。

そして迎えた１２月２５日。本番の日だ。
ＡＭ６：３０。もうファンが大勢集まっていた。ライブは午後６時スタートなのだが、「一番最初に入る」と言わんばかりの様子である。
ＰＭ３：３０。それぞれのプロダクションのプロデューサー達は最終確認を行ってから移動開始。

冬の東京は暗くなるのが早い。４時前というのにもう真っ暗だ。暗い東京の街を走るアイドル達が乗ったバス。その前には黄色いＦＤに乗る蓮の姿があった。会場まで進んでく。
だが、黒い車（センチュリー）が道を塞いでいた。道を塞ぐセンチュリーの前には男が立っていた。
道を塞ぐ男に蓮は苦情を言いに行こうとした。だが。
「・・・!?」
「よォ・・・。久しぶりだな・・・。小日向」
蓮が忘れるわけがない顔。自分の手で人生を棒に振り、何もかもを失い、未来を望む者への妨害をし続けた。かつて、蓮とのバトルで蓮を様々な手段を使い、殺そうとした。
そして未来に絶望した考え方でかつて蓮を「壊した」男。
「村岡・・・っ！」
「１年ぶりか・・・随分探したぜ」
「何故お前がいるんだ！」
「簡単だよ。お前への復讐のためさ」

突然バスが止まった。美世は何事かと思い、Ｒから身を乗り出す。美世はＲでバスの後ろをついてきていたのだ。
すると見えたのは、蓮が知らない男と言い争う姿。蓮があそこまで感情をむき出しにしているのは美世は初めて見る。いや、アイドル達全員が初めて見た。
「いい加減にしろ・・・。何故ここまでして僕達を狙う！」
「てめえがそこまで信じている『未来』がいらないんだよ！」
「僕は、いや、みんなが未来のために生きている！それを否定したら何の為に生きるんだ！」
「生きる意味なんてない・・・」
「お前がなった事を押し付けるなんて！」
「ああ。意味はない。生きる意味なんてないさ。そしてお前が生きる意味もない」
そう言うと村岡は拳銃を取り出した。

「!?」
「じゃあ、ここで死ね」
その瞬間、蓮は叫ぶ。
「みんな、早く逃げるんだ!!」
ドン、と音が聞こえた瞬間蓮のすぐ近くに銃弾が着弾した。蓮は咄嗟に回避したのだ。だが、蓮は周りを見回した途端、大勢の男達に囲まれているのがわかった。
「てめえを殺す為に1年・・・。準備し続けた。あの日、てめえにボロボロに負けて、全てを失って、ドン底に堕ちて。何もかもを失った俺は東京に来て。ヤクザになって。そして見つけた」
「黄色いＦＤに乗ったお前をな！」
周囲から銃弾が飛んでくる。蓮はアイドル達が乗るバスを逃がす。そしてＦＤに乗り込む。美世にも逃げるように指示する。
「美世さん！早く逃げて!!」
「うん！」
銃弾が当たりながらもＦＤとＲ３４は走り出す。
「逃がすなーっ！」
村岡の部下達が蓮達を追う。復讐という為だけにここまでの事態を引き起こしたのだ。

真紅のＢＮＲ３４が裏道をハイスピードで駆け抜けて行く。後ろには追っ手のチャレンジャー。銃撃を避ける為に美世が選んだルート。２トン近い車重のチャレンジャーに対し、美世のＲ３４は軽量化され約１３００ｋｇ台。機動性で優位に立つＲ３４で狭い裏道を走っているのだった。
だが、やはり狭い。１００ｋｍオーバーで狭い道を走ってるとボディを擦る。Ｒ３４のボディは傷だらけだ。
「・・・っ」
物凄い集中力でＲをコントロールする美世。少しでもミスすれば大事故だ。
その時、交差点を横断する通行人が見えた。このままでは通行人を

轢いてしまう。だが美世は減速せず、クラクションで通行人を逃げさせる。
「どいて！じゃないと轢くよ！」
ノンストップで横切って、段差を豪快に越えていく。段差に引っかかった勢いで車体下部から火花を散らす。傷だらけでもなお、ＧＴ－ＲのＲＢ２６は吠え続ける。

一方で蓮のＦＤ３Ｓは表通りを通っていた。自分が標的（ターゲット）なら目立つよう動いてアイドル達から追っ手を離せばいい。
アクセル全開で一般車を抜けていく黄色いＦＤ。物凄い勢いでこちらに突っ込んでくるＦＤ（車）にクラクションを鳴らす対向車。反対車線に出て追っ手を振り切ろうとする。
交差点に出ようとした所に別の追っ手が現れた。進もうとしたルートを潰され、やむ無く右折。そこに再び銃撃が飛んできた。
ＦＤに銃弾が命中しながら蓮はルートを作る。
「やりたくないけど・・・！」
蓮のＦＤは歩道に突っ込んで行く。通行人がいる中でだ。クラクションを鳴らしながら歩道を走る。ゴミ袋や看板などを吹き飛ばしながら。
「皆は・・・!?」
アイドル達の乗ったバスが安全な所に逃げれたかを思いながら、逃げる蓮は美世と合流するべく銃痕だらけのＦＤを走らせる・・・。

一方でアイドル達が乗るバスには追っ手がついてこなかった。追っ手が来ない事に安堵するアイドル達。だが、ただ1人美波だけは険しい表情のままだ。
「ミナミ、もう大丈夫ですよ」
アーニャが言うが、美波は表情を変えない。
「蓮さん達を追いかけていった人達は・・・。何故私達を『追わない』の・・・？」
美波の問いに答えられないアーニャ。そう言われると不可解だ。

あの男は蓮と一緒にアイドル達（私）を殺すつもりなら、何故追ってこないのか。
やがてバスは渋谷駅前交差点（スクランブル交差点）に差し掛かる。だが、運転手が異変に気づいたのはその時だった。
「車が動いてない・・・」
まるで、通せんぼされてる。そう思った事が本当に起きていた。
先程のセンチュリーと同様に車（チャレンジャー）がバリケードを張っていたのだった。気づくも既に遅し。バスは交差点の中に入ってしまい、四方八方を塞がれてしまう。
「ああっ！」
そこの中にはなんと765プロのバスもあったのだ。どうやら、こちらと同じ方法で閉じ込められたようだ。
蓮の復讐の為に、蓮が関わるあらゆる物を壊すーーー。その為に蓮とは直接関係のない765プロも標的にしたのだ。
「なんて事・・・！」

四方八方を囲まれ、動けない346プロと765プロのバス。下手な動きをしたらみんな殺される。そんな恐怖の中、一同はバスに篭っていた。

追っ手を引き離した蓮と美世。全速力で2人もスクランブル交差点に向かう。
見えたきた交差点は様子がおかしい。
「な・・・！」
蓮と美世が見たのは、囲まれて身動き取れない2台のバス。765プロと346プロのバスだった。
「そんな・・・」
「やるしか・・・ないっ！」
蓮はFDでバリケードに突っ込んで行く。美世のR34も続く。

美穂はこちらに突っ込んでくる車を見る。

「蓮さん・・・」

蓮のＦＤが見えた。その後ろに美世のＲも。

蓮と美世は自分の命を懸けてアイドル(みんな)を救おうとしていた・・・。

九章　未来への加速

バリケードを突破し、バスの前に止まった蓮のＦＤと美世のＲ３４。２台とも銃痕や擦り傷などでボロボロになっていた。
２人は車を降りる。ＦＤを降りた蓮の表情は険しい表情だ。蓮の視線の先には村岡がいた。
「・・・何故ここまでする」
「お前が関わる全てが気に入らねえ」
「何の罪もない人を巻き込むのが僕への復讐の為にやる事か!?」
交差点付近には大勢の一般人がいた。だが村岡の部下達に銃を向けられていた。警察も居たのだが、村岡が何をするかわからない。もし蓮が抵抗したら一般人が犠牲になってしまうかもしれない。その事態を恐れ、警察も手が出せなかった。
「お前は人を巻き込まないっていう思いがあるんだろ?それは褒めてやる。だが、お前がアイドル達を助けようとしたら部下達が一般人を殺す。かと言って一般人を助けようとしたらアイドル達は死ぬ。お前が選べる選択は無い」
「・・・」
何故ここまでしないと行けないのか。村岡の復讐はあまりにも大きすぎた。
「今から俺の指示に従え。従わなかったらその瞬間に皆殺しだ」
皆殺しという条件。自分への復讐をする相手のせいで罪なき人を巻き込みたくない。蓮は指示に従うしかなかった。
「こっちに来い」
蓮はゆっくりと前に進む。村岡の前まで来る。
その瞬間、村岡の拳が蓮の顔を殴りつける。
「がっ・・・」
蓮はそのまま地面に倒れる。
「蓮さん!」
美穂が叫ぶ。だが、村岡の暴力は止まらない。村岡は蓮の胸ぐらを掴み、持ち上げる。そのまま再び殴る。

蓮は抵抗したかった。だが、自分が何かしたら皆殺される。それだけは避けたい。蓮は無抵抗に殴られ続けた。
「蓮君！」
美世は無抵抗に殴られ続ける蓮を見ていられなかった。村岡は地面に倒れる蓮を蹴る。
「・・・！」
「やめてよ！」
美世が叫ぶ。その瞬間、村岡が美世を見る。
「うるせぇな・・・。ゴチャゴチャ言うな」
村岡は美世に銃を向ける。
「・・・!!」
「やめろーーーっ！」
発砲音が響く。

美世は死を覚悟した。
何故蓮君がこんなにならないといけないんだ。あたしは・・・最後までアイドルらしくなかったな・・・。そんな考えが一瞬で流れた。
・・・だが、いつまでも痛くない。なんで・・・？美世は恐る恐る目を開ける。
美世が見たのは蓮だった。
いや、左肩を撃ち抜かれて真っ赤な血が流れてる蓮だった。
「・・・大丈夫ですか。美世さん」
「・・・え？」
左腕を伝って落ちる血が血溜まりを作る。
「なんで・・・なんで蓮君が撃たれてるの」
「アイドルに何かあったらプロデューサー失格ですからね・・・。アイドルを守るのは当然ですよ・・・」

ついに村岡が発砲した。
撃たれた蓮から血が流れ、蓮が膝を着く。周囲の一般人が悲鳴を上げていた。アイドル達も起きた事の理解が追いつかない。

美穂はパニックに陥っていた。
「蓮さんが・・・嫌だ・・・死なないでください・・・！」
７６５プロ側も混乱していた。３４６のプロデューサーが撃たれた。このままだと死ぬ。そんな共通認識がアイドル達にはあった。
警察も動こうとした。だが、村岡の部下達が邪魔をして脅す。
「アンタらが動いたら皆殺しだ！」

撃たれて動けない蓮を足で抑える村岡。美世の前に村岡が来た。
「今度こそ殺すぜ。女」
村岡は再び銃を向ける。今度こそ美世を殺す気だ。周囲のどよめきが聞こえてくる。
「・・・」
美世は静かだった。一言も発さずに蓮を見ていた。村岡は黙ったままの美世に銃を向けている。
「殺される時は静かにするってか？」
すると美世が口を開くーーー。

同時刻、スクランブル交差点に向かう車が２台あった。銀色の９６４（ブラックバード）と蒼いＺ（悪魔のＺ）である。歌織と貴音は自分の車で会場に向かっていたのだ。だが、騒ぎを聞いてスクランブル交差点に進路変更していたのだった。
歌織は「ある物」を向かわせる為に、交差点に向かっていた。
「早く・・・。皆を助けないと・・・！」
貴音は好敵手（仲間達）を死なせない為に。
「まだ勝負はついていませんよ。原田美世、小日向蓮。ここで死んだら私は走る意味を持ちません。だから・・・生きてくださいまし」
湾岸の伝説を作った２台が同じ目的の為に、「共闘」していた。

「あなたはなぜ未来を捨てるんですか」

「あ?」
「だから・・・未来を見ようとしない理由を聞いているの」
「俺はもう何も無い!俺が生きているから何もかもが無くなる!こんな俺が生きてるぐらいだったら死んだ方がよっぽどマシなんだよ!」
「それでもこんな事をする理由にはならないでしょう」
「う・・・うるさい!『他人』のお前に俺の生き方を評価される筋合いはない!」
「『他人』・・・?」
　その瞬間、美穂は美世の周りの空気が変わるのを感じた。
「『他人』か・・・。確かに蓮君とあたしは1年前までは他人だった。会ったことの無い他人。でも・・・」
「蓮君は夢を持ってあたし達の所に来た。『ステージに立つ美穂ちゃんを見届ける』って約束を持って。あたしは最初そう聞いていた」
　美穂は蓮と交わした約束を思い浮かべる。
「でも・・・。蓮君は３４６プロで過ごすうちにあたしにこう言ってくれた」
「美世さんはダイヤの原石なんですよ!」
「アイドルとして自信を持ってなかったあたしを信じてくれた。そしてあたしは蓮君と共に進んでいくって決めた」
　美世の瞳は光が無い。「ブレイク」が発現していた。しかし、「怒り」や「悲しみ」の感情は見当たらない。
「あたし・・・最初レーサーになりたかった。でも・・・家が苦しくて諦めるしかなかった。・・・現実を見て過ごしてたよ。自動車整備士になって家族を助けるために働いた。でも、諦められなかった。アイドルになってからも消えなかった」
「でも・・・。今すぐに叶わなくても、未来がある限り夢を目指せる。チャンスはいくらでもある!」
「知った事を言うな!」
「蓮君だって、レーサーを目指したんでしょ?その為に努力し続けたのが蓮君。蓮君の努力はアイドルであるあたし達が1番知ってる!」
　レーサーを目指していた蓮。だが、村岡に「壊された」蓮が復活し

てから美穂との約束を優先し、封じ込めていた夢であった。
「例え、苦しくても弱音を吐かなかった！ひたすらにもがいて先に進む姿勢を崩さなかった！絶対に諦めない姿勢をあなたは取ったの!?」
「・・・くそっ」
「すぐ諦めたら本当に苦しい時の辛さがわかるわけがない。ちょっと大変でも乗り越えれる物は我慢すればどうにかなるじゃん！」
「俺はそれが出来ないくらい終わってた！」
「それはあなたが『1人で』抱えてたからでしょう!?誰だって1人でどうにか出来ない事は必ず一個や二個はある！」
「あたしだってそんな事たくさんあったよ！もうしたくない事も！でも！」
「『誰か』と一緒なら少しは変わるでしょう！あたし人前に出るのが苦手だった！でも蓮君のアドバイスで克服出来た！あなたはそんな人がいた!?」
「いなかったよ！俺はロクデナシだった！」
「なら、そんな『友達』を作ればいい！勝手に決めつけるな！」
「こ・・・のっ！」
「そりゃ勝手だったら周りから取り残される！確かに周りに合わせるのは苦手だと思うけどさ！」
「周りが『合わせてくれる』って思うな！自分から『合わせ』るの！」
　美世は村岡への『不満』をぶつけていた。
　美世は過去の自分を見ているようだった。変わるのを恐れ、行動に移せない。そんな性格だった自分自身を見ているように。だから、村岡を過去の自分と重ね、彼を変えさせたかった。
「そんなに変わるって言うなら今ここで証明しろよ！」
「今すぐではないけど！」
　新しい事への挑戦を続けてきた美世。最初は大変でも、それが出来るようになれば捉え方も変わる。
「あたしは夢を諦めない！いろんな事にぶち当たって、必死になってもがいて、あらゆる事を試す！」
「それを『2人で』やる！」

1年間蓮と共に歩んできた美世だから言えた事だ。新人アイドルと新人プロデューサー。お互い初めてがたくさんの芸能界で生きていく為にいろんな事を経験した。心が折れそうな時もあった。それでも。

「嬉しい事も苦しい事も全部！未来に繋ぐんだ！」

美世は今までの、そしてこれからの事への思いを村岡にぶつける。

「このヤローーっ！」

村岡は引き金にかけた指を引こうとした。その時、村岡は自らの足に力が加わるのを感じる。

「・・・生きてる以上、辛い事は避けれない」

蓮が村岡の足を押し上げようとしていた。村岡は足を沈める。

足に押し潰されそうになりながら蓮は抵抗する。

「目指す物を諦めそうになる事だってあるさ・・・。・・・でも」

「最初から『無理』って決めつけるのとやるだけやってから『無理』って言うのならどっちが価値のある選択だと思う・・・？」

ググッと力が加えられていく足を押し返しながら。

「やってから言ってみろ・・・。それだけで物の見方は違う」

「夢を叶える為の努力は自分を動かす『エンジン』だ！」

「夢を持ってるだけで、人は変われる！お前が言う『夢を持つ』事が罪ならそれは全人類が罪人だ！でも言い換えれば僕にとっては同じ目的を持つ『仲間』だ！」

蓮は全力で押し返していく。

「アイドル達の夢を叶えるのがプロデューサーだ！皆が夢を成し遂げる為に僕はいる！」

「皆が夢を掴む為に生きてるんだーーっ！」

蓮が足を村岡ごと押し上げた。押し上げられた村岡はバランスを崩す。

「な・・・っ」

そして蓮はありったけの力を振り絞り、村岡に突進していく。

「いい加減・・・前に進めーーーーーっ!!」

蓮の渾身の右ストレートパンチが村岡の顔面に叩き込まれる。

モロに喰らった村岡は吹っ飛ぶ。
「がふっ・・・。畜生がーーーっ！」
銃が再び蓮に向けられる。村岡の部下達も銃を向けている。今度こそ死ぬ。誰もがそう思った。だが。
「突入しろーっ！」
大勢の警察官が村岡の部下達を捕らえにかかる。あっという間に村岡の部下達が取り押さえれる。
「っと。ボス以外はこれで全員か？」
「・・・みたいね。握野君、ナイス！」
「イヤイヤ、全然。そちらも相変わらずじゃないっスか？早苗さん」
そこに立っていたのは元警察官であり、アイドルの片桐早苗と現役警察官の握野英雄だった。英雄の当時の先輩が早苗だったのである。一般人からの通報を受けた英雄が現場（ここ）に来た所、蓮達が危ないと聞き、急いでやってきた早苗とばったり再会したのだ。
部下達が取り押さえられ、村岡は呆然とする。それでも銃で蓮を殺そうと銃を向ける。だが、次の瞬間村岡の持っていた銃が村岡の手から離れた。銃を弾き飛ばされたのだ。驚く村岡の前には、見慣れぬ男がいた。
「娘が関わる男に手を出すとは・・・。いい度胸だ」
男の手にはやはり銃。だが、その銃は「自衛隊」のモノだった。目に見えない程の早撃ちで村岡の銃を弾いたのだ。
状況を飲み込めない蓮達の後ろから爆音が聞こえてきた。蓮と美世が振り向くと、９６４とＺ（ブラックバード　悪魔のＺ）があった。ブラックバードから降りてきた歌織。
「間に合った・・・！大丈夫ですか？蓮君」
「僕は・・・大丈夫です。なぜ歌織さんが？」
そういう蓮は左肩から出血してたが。
「７６５プロのアイドル達が合流場所に来なくて・・・。おかしいと思ったらスマホのニュースでこんな事になってると知って貴音ちゃんと来たの」
「えと・・・そちらの方は・・・？」

「私のお父さんなの」
歌織の父は自衛官だとは聞いていたが、まさかこんな時に会うとは。銃の扱いを見ればわかる。
「なぜこちらに・・・？」
「７６５プロの皆が危ないって聞いてお父さんが行くって聞かなかったの・・・。守ってくれる人たちも」
「え？」
そう言った途端、歌織の後ろから人が飛び出してきた。しかも結構いる。その人達は村岡に向かっていく。
「何だお前ら!?」
「大人しくしろ！」
歌織のファンの間でウワサになっている「謎の組織」・・・らしい人達が村岡を抑え込む。
「くそーっ！離せっ！」
取り押さえられた村岡に向かっていく英雄。
「午後５時５７分。銃刀法違反で緊急逮捕だ」
英雄に手錠をかけられた村岡。
「畜生ーーーっ!!」
警察官数人がかりで村岡を拘束しパトカーに連行する。やがて取り押さえられた部下達も順次パトカーに乗せられていった。

事態が収束していく交差点。交差点の真ん中には蓮と美世しかいない。
美世は泣いていた。
「あたしのせいで・・・蓮君が・・・撃たれて・・・。ごめんね・・・。本当にごめんね・・・」
「僕はこんなの大丈夫です・・・。・・・はっ、っはぁ。だから・・・、美世さん。泣かないでくださいよ・・・。泣いているのを見ると・・・僕も辛いですから・・・」
蓮は平常を保とうとしてるが、息が詰まるような痛みに襲われてい

るのがわかる。それでも尚、美世を気遣っていた。
「あたしなんかがいたから・・・」
そう言った美世。だが・・・。
「美世さん。今なんて言いました」
「あたしなんかがいたから・・・」
「なんでそんな事言うんですか!!」
蓮が「怒った」。蓮がアイドル(美世)に怒ったのは1年間通して初めてだった。その光景に他のアイドル達も驚く。
「美世さんは言いましたよね!『苦しくても弱音を吐かなかった』って!
『自信を持ってなかったあたしを信じてくれた。そしてあたしは蓮君と共に進んでいくって決めた』って。弱音を吐いてるじゃないですか!もし、美世さんが弱音をこぼしても僕が力になりますから!だから、泣かないでくださいよ!笑顔が似合うのが美世さんだから!」
「・・・うん。ありがとう・・・蓮君」
蓮の怒り。それは自らが美世の力になれなかった事。
美世が弱音をこぼさせた原因を作った自分への怒りであった。蓮は失っていた「怒り」の感情を取り戻していた。
「だから・・・この後頑張りましょう。美世さん。ファン(皆)が待ってるから」
「そうだね・・・。行こうか、蓮君」
２人はＲ３４とＦＤに乗り込む。２台ともボロボロだった。だが、その姿は困難を必死に乗り越えてきた２人を表すようだった。
エンジンをかける。１３ＢとＲＢ２６が咆哮を上げる。蓮と美世はアイコンタクトを取り、出発。７６５プロと３４６プロのアイドル達が乗ったバスはもう行っていた。ただ２人、いや４人で最後の走りに出る。
「今年最後の走り・・・今度こそ決着をつけましょう」
「どれだけやれるか・・・。私、今度こそ退かない」
貴音のＺと歌織の９６４の２台も一緒だ。４人は最後のバトルを

望む。

ライブ開演時刻の7時までの残り約1時間。
4人は決着をつけるために首都高にいた。
これだけの速度で、これだけの広いエリアの中で、会えるべくして会う。
呼び合うようにまわりにいる者すべてーーー
たがいに探し呼び寄せた者たちーーー
惹かれあい、求め合いーーー
そして争うーーーーー
首都高(ここ)を走っている以上すべて仲間。
仲間でありそして・・・。
この場所で戦うべき相手だ。
一般人(普通の人)から見たら何の意味もない称号。世間からは「犯罪者」と呼ばれる行為。「普通」からは理解されない事。
それでも。
「誰が一番速いんだ!」
ただ、それだけを知りたい為に。「最速」の称号を手に入れる為の無意味な争い。
脳ミソがズレるようなスピードの中で、あらゆるモノを賭けて戦う。それは今も昔も、そしてこれからも変わることはない。
「最後までよろしく頼むよ・・・。R」
美世はGT—R(相棒)を信じて。
「私が走ってきた意味をここで見つける」
貴音はZとの走りの「意味」を探して。
「島先生・・・。私、このブラックバード(車)にふさわしい乗り手になってますか・・・?」
歌織は島の思いを背負って。
そして蓮は・・・。
「皆と一緒に目指す物へ進みたい」

同じ目的を持つライバル(仲間)と走り続けたいという思いを胸に。

今まさに「首都高最速」を決める最後の走り(バトル)が幕を上げようとしていた。

終章　夢の舞台に乗れ（ライドオンステージ）

ＰＭ６：０５。

Ｃ１エリア外回り芝公園ランプ付近。現在は大型トラックなど物品輸送の車両がちらほらいる程度。一般車（アザーカー）はほとんどいない。バトルするにはぴったりな状況だ。

そこに４人が駆る４台の戦闘機（モンスターマシン）が姿を現す。

まず貴音が駆るフェアレディＺ（Ｓ３０）。別名「悪魔のＺ」。時代を超えて走り続ける奇跡のマシン。

続いて歌織の９１１ターボ３．６（９６４）。別名「ブラックバード」。「湾岸の帝王」「首都高最速湾岸線の黒い怪鳥」と呼ばれ、恐れられた伝説のマシン。

その後に続く蓮のＲＸ―７（ＦＤ３Ｓ）。別名「公道の流星」。かつて無敗を刻み続け、今、新たなステージで戦うスーパーマシン。

最後に美世のスカイラインＧＴ―Ｒ（ＢＮＲ３４）。別名「紅の首都高ランナー」。亡きプロデューサーの想いを背負って輝く首都高（ステージ）で走る進化するマシン。

ライブ開演までの一回切りのバトル。

この４台のマシンを駆る４人の最後のバトルが今始まるーーー。

「私が前に出る・・・っ！」

歌織の９６４が貴音のＺの前に出ようとする。９６４がＺに襲いかかる。

「ほう・・・」

９６４がＺを抑える。完璧なオーバーテイクだ。この上手さに貴音も感心する。

その後ろでは蓮のＦＤと美世のＲ３４がサイドバイサイド。２人共引く様子はない。

「もっと踏む・・・！」

「コーナー旋回ならこっちが上！」

２台は互角。だが、少しずつ美世のＲがＦＤから離されていく。

「ダウンフォースが足りない・・・っ！」
つい先程まで命の危機にあっていたばかりの蓮と美世。車も当然ボロボロのままだった。美世のＲはリアウイングが損傷しており、アクセルを踏むのが難しい状況だった。蓮のＦＤも様々な箇所が壊れており、ウイングも破損していた。だが、それでもバトルに望む２人。
リスクを承知で踏み込んでいく。少しでも破錠したら死ぬ。普通に見たらとんでもない状況だった。命知らずと言うのかそれともーーー。

４台は浜崎橋ＪＣＴ（ジャンクション）を右に曲がり、羽田線へ入る。そこから芝浦ＪＣＴから環状１１号線。レインボーブリッジへ差し掛かる。４台とも相当なスピードで駆け抜けて行く。
「ここまで一体感を感じて運転できるのは初めて・・・」
美世は今まで感じた事がなかった安心感に包まれていた。車はボロボロ。自身も先程まで命の危機に陥っていたというのに。なぜここまで安心できるんだろう。美世は不思議に思っていた。
有明ＪＣＴを抜ける。そして超高速ステージの湾岸線に出た。４台は神奈川方面に向かって行く。
湾岸合流。そこから見える限りでは一般車はほとんど見えない。ほぼ車が通らない湾岸での最高速バトルが始まる。
貴音のＺは歌織の９６４を抜きにかかる。スリップストリームを使い、９６４に近づく。その後ろに蓮のＦＤと美世のＲ３４も続く。
「行ける・・・」
貴音のＺが９６４の後ろから飛び出す。蓮のＦＤが９６４に詰め寄る。
「最高速は厳しいけど・・・」
美世のＲが蓮のＦＤの後ろから飛び出した。紅いボディを空気が叩く。傷だらけのボディは耐えれるか怪しい所であった。
「お願い。耐えて・・・！」
Ｒを信じて美世はアクセルを踏み込む。フラットアウトーーー。
２５０ｋｍオーバー。Ｒのボディが歪んでもおかしくない負荷が

のしかかる。ミシミシと嫌な音が聞こえてくる。空気抵抗でリアウイングが壊れ始めたのだ。
「今ここで負けたくないの・・・！」
リアウイングを失ったら一巻の終わり。ダウンフォースを完全に喪失し、コントロール出来ない。そのままクラッシュ一直線だ。確実に命を失うカウントダウンが始まっている。
「離されてたまるか・・・！」

一方、貴音と歌織は競り合っていた。
前からぶっ飛んでくるような一般車を避けつつ、ポジションを入れ替え続ける激戦を繰り広げていた。歌織の９６４は超高速域では分が悪い。燃料が減る事で起きる重量バランスの変化による安定性の変化が発生するのだ。
それがかつて島が乗っていた時のブラックバードが３００ｋｍオーバーを目指すような車ではなくなった理由である。そんなリスクを承知で攻めていた島の技術は驚異的であったと評するほかない。
歌織当初はこの車の特性に苦戦した物だ。だが、乗る回数が増えるに連れてどんどん動きを洗練させていったのである。
今の歌織のその運転は島の全盛期を超える物であった。
「もっと・・・もっと踏む！」
「音速の貴婦人」の本領発揮である。歌織のブラックバードはＺを引き離し始めた。ブラックバードからは白いオーラが見える。
「ぜっと・・・。私を信じてくださいまし。私も一緒ですから」
貴音はブラックバードに引き離されていても焦らない。むしろ、再び前に出るための算段を立てているようだった。
見る者全てを惹きつける妖しい紫色のオーラを纏うＺはまさしく「悪魔」であった。

４台は絡み合うようにして超高速で湾岸を突っ走る。

途中に一般車がちらほらいるが、ほぼないと言える。４台の為にあるような湾岸(道)を走り抜けていく。
先頭は歌織の９６４。現在、貴音のＺを抑えて走っている。その後ろに貴音のＺ。静かに再び前に出る機会を伺っている。美世と蓮は横並びで競り合う。

４台は空港トンネル手前に差し掛かる。
ここで貴音が勝負に出る。歌織の９６４を追い抜きにかかる。Ｚは内側(イン側)から外側(アウト側)にスラロームする。
「!!」
歌織の９６４の隣に並ぶ。緩い左コーナーに並んで入っていく。
法定速度で走れば何ともないコーナーが３００ｋｍオーバーで曲がると恐怖のコーナーに変わる。少しでも操作ミスしたら一瞬で吹っ飛ぶ。
歌織の９６４はイン側にいる。Ｚがアウト側。もし、歌織がミスすれば９６４と一緒にＺは壁に叩きつけられる。
「嘘でしょ・・・!?」
コーナーに入る２台。９６４はジリジリとリアが流れ始める。
「Ｇに負けて、９６４が路面から離れていく・・・っ!」
ここで吹っ飛んだら貴音も巻き添えだ。
「堪えて・・・。前に出て!」
なんとか、持ち直した歌織の９６４。僅かに速度を落とし、立ち上がって行く。この時点でＺが前に出ていた。
速度を落とした９６４を再び３００ｋｍまで加速させる。
「再び３００ｋｍ・・・!」
Ｚの前に出る。だが、Ｚもさらに加速する。
「な・・・。っ!」
９６４を加速させ続ける。５速８５００回転。これ以上はエンジンブローする恐れあり。
「これ以上は・・・っ」

歌織は限界と判断しアクセルを抜く。９６４はスローダウンしていく。
美世は失速する９６４を見ていた。
「歌織さんがスローダウンした!?・・・限界みたいね」
スローダウンした９６４を避けて美世のＲ３４と蓮のＦＤが前に出る。
「これで勝負をつける!」
Ｚに並んだ美世のＲはフルスロットル。ＲＢ２６が底力を見せる。
「・・・・!」
貴音は横に見える真紅のＲを見ていた。
「そうでなければ。やはり貴女はこの車で走る意味を私に教えてくれる!」
蒼いＺと紅のＲが空港中央を駆ける。どちらも譲らない。そこに。
「前に出る!」
蓮のＦＤが一番右の車線に出る。左側美世Ｒ、中央貴音Ｚ、右側蓮ＦＤと３台が並ぶ。
３２０ｋｍ。３台は一歩も引かない。
貴音は美世のＲと蓮のＦＤからオーラを見た。
「２人はこのままでは終わらない・・・。でしょう。ぜっと」
多摩川トンネル内。一般車が先程よりかなり多い。一般車を縫うように避けながら、３台は争う。
「もう少しだけ耐えて・・・」
美世はまるで念じる様に呟いていた。
ダメージが大きいＲでここまで走れていたのが奇跡だった。
「こんなに楽しく走れるなんて・・・嬉しいな」
蓮はそんな事をこぼしていた。忘れないように言っていくと、美世のＲと同様に蓮のＦＤも損傷しており、蓮自身に至っては銃撃されて左肩を撃ち抜かれていた。先程までの運転は手負いの状態でやっていたのである。左肩の出血は止まっていない。
「もう・・・時間がない」
ライブ開演までも、自分の命の終わりまでも。

けれどもこんなに楽しい夜は絶対にもうないであろう。

同じ夜は二度と無いーーーーー。

「ありがとうございました・・・。ぜっとで走る意味を見つけられた。それだけで私は十分です・・・」

貴音のＺが蓮のＦＤと美世のＲを前に出す。

「え!?」

「貴音さん・・・」

貴音は「最速」を２人に見出した。「最速」を２人に見つけた。そうなれば、自分はもう「最速」ではない。

そう思い、貴音は勝負から降りるーーー。

こうして残ったのは蓮のＦＤ３Ｓと美世のＢＮＲ３４の２台だけになった。

２台ともボロボロ。それでも。

「「絶対負けない！」」

この思いだけに勝負を降りようとはしない。蓮のＦＤからは黄色のオーラが、美世のＲからは赤色のオーラが出ていた。

片方は輝く星のような黄色、もう片方は燃える炎のような赤色のオーラだった。

２台は横羽線に入る。勝負が終わるまであとわずかだった。

蓮と走る美世。今までにないテンション。

「こんなに楽しい走りができて・・・あたし・・・」

「幸せ!!」

美世の脳内にイメージが浮かぶ。「ブレイク」が発現。しかし、今までなかった「喜び」で発現したのだ。

３００ｋｍオーバーで一般車を避けつつ、ＦＤと並ぶ。

もう少しで浜川崎に着く。ここで決着をつける。
２人はそう決めていた。

「ラスト・・・！行けええっ！」
美世はステアリングのＮＯＳ噴射スイッチに指を伸ばす。ＧＴ―Ｒ最後の力を振り絞る。
蓮もステアリングのスイッチに指を伸ばし、スイッチを押し込む。今まで使った事がないＮＯＳ噴射スイッチだった。
「これだけ・・・耐えて！」
ＮＯＳ噴射により加速するＦＤ。未体験の加速力に蓮はシートに押し付けられる。
「うっ・・・！」
左肩が痛む。だが、その痛みすらテンションに変わる。
ＧＴ―ＲとＦＤが並ぶ。絶対前に出る。そう言ってるようにオーラがほとばしる。
「いけるっ！」
美世のＲ３４が蓮のＦＤの前に出る。ＧＴ―ＲはＦＤを引き離していく。
右コーナー進入。
美世は勝ったと確信する。その瞬間だった。
ガッシャァと異音が聞こえた。それと同時に、リアタイヤが流れＧＴ―Ｒは外（アウト）へ膨らんでいく。
限界を迎えたリアウイングがステーから外れた。これにより、ウイングがちぎれかけの状態になってダウンフォースを完全に失った。ダウンフォースを喪失し、リアに荷重がかからなくなったのである。
美世はコントロール不能になったＧＴ―Ｒを立て直せなかった。
「操縦不能ーーーーー」
リアから大きく流れるＧＴ―Ｒ。美世は「死ぬ」と思った。
美世の脳内に走馬灯が流れていく。

その時、黄色い蓮のＦＤがアウト側に「いた」。その動きはまさにＲ３４を受け止めるために。ドォンと音がした。
リアから流れ出すＧＴ―Ｒをボディで受け止めたのだ。体制を立て直したＲは失速。体制が戻る頃にはＦＤははるか遠くにいた。
後から追いついた歌織はその光景に驚く。
「今のは一体何・・・？」
「ＧＴ―Ｒの動きが・・・まさかわかってたの・・・？」
だが、考えを変える。
「あれは感覚でやった・・・。絶対に考えてでは出来ない・・・！」
蓮に「救われた」美世。
「いやいや・・・凄すぎでしょ・・・。あたしを助けて・・・。そして『速い』・・・」
遠のいていくＦＤ。その姿は「勝ちましたよ」と言っている様だった。
「そういや蓮君はあたしに勝った事なかったな・・・。・・・ふふ、完敗だよ。蓮君・・・」

こうして、首都高最速を決めるバトルは蓮の勝利で幕を閉じる。傷だらけで辿り着いた勝利だった。
この後、４人はライブ会場に向かう。

ＰＭ６：４５。
ライブ会場前で待っているのは千川ちひろと武内Ｐ、そして赤羽根Ｐだった。
「遅いですね・・・。何があったんでしょうか」
「わかりません。連絡がないのが気になりますね・・・」
ライブ開演１５分前。本来の集合時刻はとっくに過ぎている。アイドル達はもちろん、プロデュー蓮サーもいなかったのである。蓮に電

話が繋がらない。
その時、スマホを見ていた赤羽根Ｐが顔に驚きを見せる。
「渋谷駅前交差点で銃撃・・・!?」
さっきまで最終チェックしていた為、スマホを確認できてなかったのである。
「アイドル達のバスが占拠されている・・・!?」
嘘だと信じたい。今頃アイドル達はどこにーーー。そう思った赤羽根Ｐ達。
そこにヘッドライトの光が見えた。
「あ・・・来た!」
７６５プロのバスだ。続いて３４６プロのバスも。
「よかった・・・!!」
降りてきたアイドル達に事情を聞く赤羽根Ｐやちひろ達。アイドル達は恐怖を浮かべた顔で答えた。帰ってきたその答えは
「３４６プロのプロデューサーが撃たれた」
信じ難い答えが出てきて混乱するちひろ達。そこに４台の車が到着する。
美世のＧＴ―Ｒと蓮のＲＸ―７はボロボロだった。美世のＧＴ―Ｒはリアウイングが今にも取れそうだ。
「一体何が・・・!?」
車から降りてきた美世を見てちひろは問う。
「一体何があったの!?」
美世は答える。
「蓮君へ恨みを持った男に襲われて・・・。蓮君があたしを庇って・・・」
その時、ＦＤのドアが開けられる。降りてきた蓮を見て思わずちひろが顔を覆う。
「蓮君・・・!?」
蓮のその姿は左半身が血で真っ赤に染まっていた。蓮自身も意識がはっきりしないようだった・・・。
「ちひろさん・・・。遅れてすみません・・・」
「それよりもあなたが大丈夫じゃない！」

「はは・・・。ちょっと大変でした・・・」
そう言った途端、蓮が倒れそうになる。慌てて武内Pが支える。
ちひろが蓮を医務室に運ぼうとするが、蓮が拒否する。
「運ばれたらライブを見届けられない・・・!」
蓮の決意に負け、蓮を舞台裏に居させる事にした。

大急ぎで最終確認や着替えをするアイドル達。
美世も着替えようと部屋に向かおうとするとちひろが声をかける。
「美世ちゃんの衣装は『スターリースカイ・ブライト』じゃないですよ」
「どういう事ですか?」
「あなたの衣装は特別な物ですよ」
ちひろに連れられて行った部屋には赤い衣装があった。まるでレースクイーンの衣装みたいだ。
「これが美世ちゃんの衣装ですよ。蓮君が色んなところに掛け合って用意してもらったんですよ」
「蓮君・・・!」
忙しい中であたしの為にこんなサプライズを用意してくれたと思うと胸が詰まる。急いで着替えて集合する。
円陣を組み、気合いを入れる。
「「「おーーーーー!」」」
そこに蓮がやってきた。
「蓮君・・・!平気・・・なの?」
「平気・・・と言ったら嘘になりますね。でも、絶対に見届けたくて・・・。無理言って」
「蓮君・・・衣装ありがとう」
「美世さんが喜んだのなら何よりです」
「あたしは上手くできるよね・・・」
「ええ。人並み以上の努力をずっとしていたのが美世さんですから」
「うん。ありがとうね。・・・よし!」
「あたしの持つパフォーマンス全部を出す!フルスロットルでやって

みる！」
「その意気です！美世さん！」
　美世を見送った後に美穂を見る蓮。
「蓮さん・・・」
「美穂ちゃん・・・。ごめんね。心配かけて」
「あの時蓮さんが本当に死んじゃうって思いました・・・。私の前からいなくなるのが怖かったんです・・・！」
「大丈夫だよ」
「え？」
「言ったでしょ。僕は約束を守る。絶対に死なないさ。もしあの時死んでいたら・・・。僕は約束を破ってしまうから」
「だから、生きる。生きて約束を果たす」
「・・・はいっ！ステージに立つ私を見てください！」
「頑張ってね。美穂ちゃん」

　そして７時。
　一夜限りの大舞台。ライブが始まった。
　会場中の熱気は最高潮。まずは３つのプロダクション合同で「ＴＨＥＩＤＯＬＭ@ＳＴＥＲ」。天海春香を先頭にアイドル達がステージに出ていく。
「みなさーん!!今日は楽しんでいってくださいねー!!」
「「「「わーーーーーっ!!」」」」
　凄まじい歓声が聞こえてくる。ＡＳ組、シアター組、３４６プロ、最後に８７６プロが出ていく。
　オープニングが終わった後、７６５ＡＳの１３人が歌う「ＲＥＡＤＹ!!」。
　ベテランの天海春香や如月千早の見せるパフォーマンスは流石の

物。
その次に「ラムネ色　青春」とＡＳ組が魅せる。
次にシアター組にバトンタッチ。
最初に如月千早、北沢志保、所恵美、田中琴葉の４人で「Ｂｌｕｅ Ｓｙｍｐｈｏｎｙ」。彼女達を支える大きな要素である「歌」への思いを彼女達は歌いきる。
続いて北沢志保の「ライアー・ルージュ」、春日未来の「素敵なキセキ」、矢吹可奈の「オリジナル声になって」など、シアター組のアイドル達のソロ曲のラッシュ。
そして最後に・・・。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！」を７６５プロのアイドル５２人全員で歌いきる。
「「ありがとう」」
７６５プロのアイドル達がステージを降りても、その歓声は凄まじい。まるで会場自体が揺れるよう。
３４６プロのアイドル達が入れ替わるようにステージに出ていく。
シンデレラプロジェクトのアイドル達が輝く舞台（ステージ）に立つ。
「流れ星のように輝きますっ！」
最初にニュージェネレーションズの３人が歌う「流れ星キセキ」。
「だけどみんなで笑っていたいよ」
「同じ空を見て」
「もう迷わない！」
一度挫折を味わった彼女達が歌うからこそ、この歌は意味がある。
その後にラブライカの「Ｍｅｍｏｒｉｅｓ」やキャンディアイランドの「Ｈａｐｐｙ×２Ｄａｙｓ」などシンデレラプロジェクト１期生達が魅せる。シンデレラプロジェクトのユニット曲終了後、ソロ曲に入り始める。
島村卯月の「はにかみｄａｙｓ」や渋谷凛の「Ａｎｅｍｏｎｅｓｔａｒ」などシンデレラプロジェクトのメンバー達のソロ曲を歌ってゆく。
シンデレラプロジェクトのメンバー達が歌い終わった後にＢＲＩ

ＧＨＴ：ＬＩＧＨＴＳの２人が出てくる。
「聞いてください。私達の歌を」
　文香とありすは「咲いてＪｅｗｅｌ」を２人で歌い上げる。

「行ってきます。蓮さん」
「頑張るよ！蓮君！」
「皆さん頑張って！」
　フェアリーテイル＊マイテイルとウィンター・Ｆ・ドライバーズのメンバー達がステージに出ていく。２ユニット合同だ。
　センターの美世がステージから見える観客を見渡す。初舞台でこんなにも人が来てくれた事が嬉しかった。
「皆さん、こんばんは！原田美世です！」
「今日あたしは初ステージであり、初ライブでもあります！」
「最初、アイドルとしてやって行けるかわからなかったあたしがここまで来た事が嬉しいです」
「でも・・・。たくさんの人の前でライブをするのは緊張します。けど、言い換えれば注目してくれてるんだ、とあたしは捉えてます」
「これがあたしの努力の成果です！聞いてください！『お願い！シンデレラ』」

「お願い！シンデレラ」
「夢は夢で終われない」
「夢」を目指してるから、「夢」で終わらせずに実現させるんだ。
「動き始めてるーーー、輝く日のためにーーー」
　今、自分が乗った舞台（ステージ）で輝くーーー。
「私に出来ることだけを重ねてーーー」
　努力し続けて、自分を変えてきた。今、その成果を出す。
　サビに入り、美世のテンションは上がる。
「お願い！シンデレラ！」
　もっと、皆に声を届けたい。
「叶えるよ、星に願いをかけたならーーー」

ミスなく、1番を歌い終えた美世達。2番も高い集中力で乗り切る。
そして曲はラストの方に入る。美世の眼前にはサイリウムによる赤い光が広がっていた。
「心にシンデレラ」
「私だけじゃ始まんない」
蓮君と会わなかったら、今のあたしはない。
「変われるよ、君の願いとリンクして」
「みつけよう！ＭｙＯｎｌｙｓｔａｒ！」

「探し続けていきたい」
「涙のあとにはーーー」

「また笑って！」
「スマートにね」
「でも可愛くーーー」
「進もう！」
歌い切った。達成感で美世は胸がいっぱいだった・・・。

「「「わぁぁぁぁぁぁぁ!!」」」
観客からの歓声が響き渡る。歌い終わった美世が視線を移すと家族が見えた。親方も。
（見に来てくれたんだ・・・）
観客席の奥の方を見ると・・・。
笑顔で手を振っている「プロデューサー」が見えた。
当然、実際にいる訳じゃない。でも、美世はそこにプロデューサーが「いる」と確信していた。
「どうだった・・・？あたし、輝けてた・・・？」
そこに「見えない」プロデューサーに美世は聞く。するとプロデューサーは表情を変えた。

満面の笑みで「１００点満点だ」というように・・・。
美世は笑みをこぼす。
「ありがとう・・・プロデューサー」

３４６プロのアイドル達はここで終了。
最後は８７６プロの３人達だ。
日高愛は自身の母である「日高舞」の持ち歌『ＡＬＩＶＥ』を、水谷絵理は「プリコグ」を、秋月涼は「Ｄａｚｚｌｉｎｇ Ｗｏｒｌｄ」をそれぞれ歌った。
最後に、天海春香や島村卯月、春日未来達が集まり「ＩＤＯＬＰＯＷＥＲＲＡＩＮＢＯＷ」を歌った。

「みなさーん!!今日は楽しかったですかー!?」
春香の問いかけに答えるように歓声が響く。
「また、会いに来てくださいねー!!」
こうして７６５、８７６、３４６という３つのプロダクション合同のオールスターライブは幕を閉じた。

「やったー!!蓮君!」
「蓮さん・・・!私、やりました!!」
蓮に美世と美穂が駆け寄る。
「２人共お疲れ様でした。美世さん・・・。どうでしたか?初ライブ」
美世は満面の笑みで答える。
「もう・・・最高ってしか言えない!あたし、もっと歌いたいって思うくらい!」
「美世さん・・・。努力が実ってよかったです・・・!」
「えへへ・・・」
「・・・美穂ちゃん、『約束』守ったよ」
「はい・・・!蓮さんが見てくれて本当に嬉しかったです!」

よかった。美世さんと美穂ちゃんを見届けられて・・・。

「よかった・・・」
その瞬間、蓮が倒れた。
「えっ・・・」
「・・・蓮君？」
倒れた蓮の周りに血が広がっていく。
「蓮・・・さん？」
「蓮君・・・！ちょっと蓮君！しっかりして！」
ピクリとも動かない蓮。倒れた蓮から広がる血を見て叫ぶアイドル達。
ちひろや武内Ｐ、赤羽根Ｐが駆け寄ってきた。
「急いで救急車を呼んでください！」
「もしもしーーー」
慌ただしく動くちひろや武内Ｐ達。美世が蓮を起こす。
「生きて・・・！このまま死んだら君の夢はどうなるの！」
やがて、救急車が到着。
武内Ｐ達が見守る中、蓮は担架に乗せられ救急車の中に消える。祈るような思いで救急車を見つめる美世達。
「神様・・・！蓮君を助けて・・・」
蓮を乗せた救急車はサイレンを鳴らしながらライブ会場を出ていった・・・。

翌日、朝のニュース番組では昨日の事件の特集がどのチャンネルでもやっていた。
３４６プロはいつも通りだった。ただ一つ、蓮がいない事を除いて。
美世、美穂は新年の番組の撮影などで忙しかった。
こうして、３１日まで忙しいスケジュールの中活動したアイドル達だった。

２０１２年1月1日。新年を迎えた。
美世はある病院にいた。今日病院には事務所の商用車であるカローラで来ていたのだ。あの日ボロボロになったＧＴ―Ｒは現在修理をしてもらっている為である。
美世は診察室で待っていた医師に聞く。
「桜庭先生。蓮君はどうですか・・・？」
桜庭と呼ばれた医師が答える。
「現在もまだ意識は戻っていません。なんとか一命は取り留めましたが・・・失血量が多く、身体機能の回復が遅れているのです。身体機能の回復次第で意識は戻ると思いますが・・・」
「そうですか・・・」
あの日救急車で運ばれた蓮は緊急手術が行われた。１８時間に及ぶ大手術だった。
撃たれた左肩の治療は早く終わったが、あまりにも失血量が多く、輸血作業の難航などが重なり、時間がかかったのだ。
「あと数日程で意識が戻ると見込んではおります」
やがて話が終わる。
「桜庭先生、ありがとうございました」
病室に来た美世。
ベッドで寝かされている蓮を見る。蓮の顔には酸素マスクが付けられている。服を着ていない蓮の上半身には包帯が巻かれていた。左肩は若干だが血が滲んでいる。
目を覚まさない蓮の寝顔を見て美世は呟く。
「蓮君・・・。あたしね、夢を叶えられそうだよ。・・・昨日、モチュールの人が来てね。あたし、春からＧＴ５００のドライバーとして活躍しないかってオファーが来たの」
昨日の出来事。
３４６プロに赤いジャケットを来た男達が来た。男が着るジャケットの背中には「ＭＯＴＵＬ」とある。美世は驚いた。
「えっ!?」

男達がちひろさんと何やら話をしていた。しばらくしてあたしはちひろさんに呼ばれた。
「美世ちゃん、応接室で話があるから行ってね」
「はい・・・？」
ワケもわからないままあたしは応接室に行った。
そこにはスーパーGTでモチュールの監督を務める「鈴木一義」がいた。
「やぁ。待っていたよ」
「えええええ!?」
憧れの人が目の前にいる・・・。あたしは夢を見てるのかな・・・。

本来こういう事はプロデューサーが相手側へ出向くのが普通だ。だが、現在蓮はいない。
美世がソファーに座り、差し出された書類を読む。内容はドライバーとしてのシーズン契約書類だった。レースクイーンではなく、正式ドライバーとしての契約である。
「!?」
「君にドライバーになってもらいたくてここに来たんだよ。これはスカウトだと思って貰って構わないよ」
「なぜあたしが？」
「君の腕が欲しいんだ」
「君の技術はよく聞くよ。君が普段乗っているGT―Rだって自分で仕上げているのだろう？」
「そうですけど・・・。なぜ知っているんですか？」
「色々な所からそういう事が流れてくるんだよ・・・。ま、『非合法』な所での走りを見てだけどね」
美世は思い当たる節をなんとなく思いつくが口には出さなかった。
「君の走りはセンスがあるんだよ。そこでアイドル活動と並行してウチのチームでまず1年間ドライバーをやってもらいたい」
「ウチのドライバーもパーツメーカーのテストなどで実戦テストのスケジュールが上手く取れなくてな・・・。前のシーズンで1人辞めて

しまったのもあってね。ドライバーがいなかったんだ」
「テストだけなら俺自身がやればいいけども、正直に言うと俺も年なんでね。体が持たない・・・」
「でも、君は若い。その若さで車を仕上げる技術を持ち、走りに関しても高い技術だと評価できる。今後の為にも、若いドライバーの育成が急務なんだ・・・」
　美世は固まっている。
「過去に実際にタレントとレーサーを兼業していた例は多いぞ。例えば・・・そうだな、近藤真彦さんとかね。ぜひ検討していただきたい」
　そう言って一義は頭を下げた。
「わっ、っわ、頭を上げてください！」
　美世は一義の頭を上げさせようとする。
「・・・願っても無い話です。あたしなんかで良ければ、この場で契約書にサインをしても良いくらいです」
　美世は目を輝かせている。
「でも・・・まだあたしにはやる事があります。この話、前向きに考えます。もう少しだけ待ってください。必ず行きますから」
「楽しみに待っているよ。原田さん」

　これが昨日美世にあった出来事だ。
　レーサーを目指していた美世にとっては大きなチャンスだ。でも。
「君の夢はどうするの・・・？あたし、君の夢を応援してるんだよ。君がいたからあたしは頑張れたんだよ。君がこんな所で止まってちゃダメだよ・・・」
　目を覚まさない蓮に向けてポツポツと言葉が出てくる。
「君は皆を動かす力を持ってる。もし、君が止まったら皆はどうするの・・・？」
「だから・・・お願いっ！戻ってきて・・・っ」
　美世の頬には涙が伝っていた。
「皆が３４６プロ（事務所）に戻ってくるのを待ってる・・・。待たせちゃダメだよ・・・」

絞り出すような声で美世は告げる。
その時。
カタン、と音がした。美世が顔を上げると、ベッドの柵に伸びる包帯でぐるぐる巻きの左腕が見えた。
「・・・蓮君！」
蓮はここはどこか考えているようだ。キョロキョロと視線を動かす蓮の目と美世の目が合う。
「・・・美世さん？」
「・・・!!よかったっ！よかった～!!」
美世は蓮に抱きつく。
「・・・？」
「蓮君が死んじゃうと思った・・・！怖くて！辛くって！」
美世は今まで我慢していた感情を吐き出す。
そんな美世を見て蓮は言う。
「大丈夫ですよ・・・。夢を叶えるまで僕は死にませんから」
「・・・うん！うん!!」
蓮は意識を取り戻したのだった。

意識が戻った蓮と話す美世。
「モチュールの人が来た？」
「うん。まず1年間やってみないか、って」
「・・・!!凄いですよ美世さん！夢を叶える大チャンスですよ！」
「うん!!・・・蓮君」
「なんですか？」
「君はどうするの？」
そもそも蓮は美穂との「約束」を守るために３４６プロに入社した。だが、それはこの間のライブで果たされた。約束を守った以上、蓮は３４６プロにいる意味はもう無いような物だ。
「・・・僕はレーサーになろうと思います。でも・・・」
「３４６プロを辞めようとは思ってません」

「３４６プロに来て、美穂ちゃんとの約束を守るためにって最初は思っていました。でも、３４６で過ごすうちに僕の考えは変わりました」
「皆いろんな事を思ってアイドルをやっているんだって思った時、僕は皆が『家族』みたいに思えたんです。・・・持ち上げすぎって思われるんだろうけども、僕はそう思ってます」
「夢を叶えようと頑張る皆の力になりたいって僕は決めたんです。美穂ちゃんだけじゃなく、皆の為に」
「僕にとって３４６プロは『家』みたいな存在だから・・・。離れるわけにはいかないんです」
「・・・もちろん、レーサーとプロデューサーの兼業は大変だと思ってます。それでも」
「僕の新しい『夢』を叶える為に頑張るんです」
　蓮の新しい夢。それはアイドル達（皆）といる事。
「僕は夢を目指す皆の力になりたくて３４６プロ（ここ）にいたいんです」
「蓮君・・・」
　そこに桜庭先生が来た。
「小日向さんの意識が戻ったようですね、原田さん。・・小日向さん、体調はどうですか？」
「僕は平気です。・・・体がなまってそうですけど」
「・・・大丈夫みたいですね。小日向さん」
　この後、蓮を車椅子に乗せ、移動。蓮と美世は退院手続きを終わして病院を後にした。カローラで３４６プロに向かう。

「久しぶりって感じがします・・・」
「蓮君が寝てたのは1週間ちょっとだから・・・まぁ久しぶりかな？」
　美世が運転するカローラの中で話し合う蓮。
「皆元気ですかね？」
「皆元気だよー。ま、特番で忙しそうだけどネ」
「あはは・・・。美世さんは何か番組出たんですか？」
「んー、出たな。歌番組とかいろいろ」

やがて事務所に着いた。
カローラから降りる2人。蓮は降りた途端、足がふらついた。慌てて美世が支える。
「・・・全然、立てないです」
「無理しないでよ・・・。いきなりまたケガしたら皆困るよ」
「・・・ですね」
美世に支えられながら事務所に入る蓮。
するとアイドル達が一斉に声をかける。
「「あけましておめでとうございます!!」」
蓮はキョトンとしてたが、思い出す。
「あっ・・・。今日は新年か・・・」
あのライブ以来に会うものだから会うアイドルに心配される蓮。
「プロデューサー!大丈夫だったー!?」
「うん。もう平気だよ」
「よかった!!」
年少アイドル達に心配された後、晴にツッコまれる。
「・・・その割には足が大丈夫じゃなさそうだけどな」
「キツい・・・」

こうして事務所に復帰した蓮だったが、実際に仕事が再開したのは2週間後だった。リハビリがあったのである。

2月、すっかり元の調子を取り戻した蓮の元に再び鈴木一義が来ていた。美世の返事の為だ。
美世は契約書にサイン。これで正式にモチュール所属のレーシングドライバーになったのだ。
「やったっ!!夢が・・・叶った!!」
「良かったですね!美世さん!!」
一義が蓮に言う。
「君もレーサーにならないか?」

「え？」
「原田さんとは違うが・・・。レーサーになれるチャンスがある」
「スーパー耐久でドライバーを募集してる所があってだね。どうだい？」
「いいですね。そのチームの事を教えてくれませんか？」
「わかった。後で送るよ」
「一義さん、美世さんをよろしくお願いします」
「ああ。彼女の夢を叶える為にも頑張るよ」
こうして美世は晴れて正式にモチュール所属となり、後日蓮の元にチームのドライバーの案内が届いた。
蓮は直ぐに行き、その結果ドライバーになれたのだった。
２人の夢が叶ったのだ・・・。

桜が咲く季節になった。
ここは鈴鹿サーキット。美世がここでレースを見て「レーサーになりたい」と決めた場所だ。
彼女は夢を目指すきっかけになった場所で今、夢を叶えた。

「意気込みをどうぞ！」
「・・・初レースなので緊張してますけど、あたしが出来る事をしっかりやりきります！」
報道陣に囲まれる赤いレーシングスーツを着た女性。原田美世だ。
アイドルがレーサーとしてデビューするという事に世間から注目が集まる。
ホームストレートにあるグランドスタンドには横断幕が見える。
美世のファン達が掲げる物だ。「ＭＩＹＯＦＩＧＨＴ!!」と書かれた

赤い横断幕がスタンドを埋める。
美世は自身が乗るマシン(GT—R)の前に到着。ドアを開ける。ドアやボンネットにあるゼッケンの番号は「３４」。
マシンに乗り込む美世。集中力を高めた彼女の目は鋭い。エンジンを始動させる。ＧＴ—Ｒのエンジンが轟音を轟かす。
やがてフォーメーションラップ開始。全車が一斉に動き出す。一斉に前に出る、というような静かな前触れを見せながら全車はコントロールラインを目指す。

場所は変わって富士スピードウェイ。今年設立された新チーム「Ｄ—ＬＩＮＥ」のガレージの中。
白いレーシングスーツを着た１人の青年がこれから戦う為の相棒の前に立つ。
白い車体に入る赤いストライプが目立つ「トヨタ　８６」（ＺＮ６）だ。
彼は今回デビュー戦。初めての舞台だ。ようやく憧れの舞台に立てたと実感する。
ガレージ内の８６のエンジンに火が入る。水平対向エンジン(F A 2 0)が低いエンジンサウンドを発する。監督の指示が入り８６は動き出す。
「・・・行きます」
成長した蓮が８６をスタート位置に移動させる。
フォーメーションラップ開始。周りのＢＲＺやインテグラと共に動き出す蓮の８６。高鳴る思いを胸に蓮は８６を進ませる。

走る舞台(ステージ)は異なるが、夢は同じ蓮と美世。
そんな２人は憧れの舞台(ステージ)に来れた。小さい頃からの夢が叶った。

その夢の舞台で輝こうとする２人。

シグナルがグリーンに変わる。

「レーススタート!!」

今、コントロールラインを超えた。

蓮と美世。２人のレース（夢）はまだ始まったばかりだ。

美世のＧＴ―Ｒと蓮の８６はトップを目指して走り出した・・・。

人物紹介などまとめ（ネタバレ注意）

マシン紹介

・蓮搭乗車種・・・マツダ　アンフィニＲＸ―７ｔｙｐｅ―Ｒ（ＦＤ３Ｓ）

カラー・・・コンペティションイエローマイカ

エンジン仕様

１３Ｂ―ＲＥＷ（クロスポート仕様）＋ＴＤ０６ＳＨ２５Ｇ→Ｔ７８　３３Ｄ

ブースト１．２ｋｇで最大５２０馬力→６００馬力（ＮＯＳ使用で＋４０馬力）

足回り

サスペンション・・・オーリンズ

ブレーキ類・・・エンドレス

内装類

快適装備撤去

ロールケージ

追加メーター

プロドライブ製ステアリング＋ＮＯＳ噴射スイッチ

ＢＲＩＤＥ製フルバケットシート

外装類

フロントバンパー

サイドスカート

ＲＥ雨宮製ＡＤＨＯＯＤ９

ＲＥ雨宮製ＡＤＭＩＲＲＯＲＴＹＰＥＩ

ＶＯＬＴＥＸ製ＧＴウイングＴＹＰＥⅡ

テールランプを後期型の物に変更

タイヤメーカー

ＴＯＹＯ　ＴＩＲＥＳ

ホイール

RAYS　GLAMLIGHTS57CR

・美世搭乗車種・・・日産　スカイラインGT―R　V：spec（BNR34）

カラー・・・ライドオンレッド（オリジナルカラー）

エンジン仕様

RB26DETT（2．8L仕様）＋T88―34D

ブースト1．4kgで最大580馬力（NOS使用で＋70馬力）

足回り

サスペンション・・・HKS

ブレーキ類・・・エンドレス

内装類

MFD（マルチファンクションディスプレイ）以外の快適装備撤去

ロールケージ

グレッディ製追加メーター一式

MOMO製ステアリング＋NOS噴射スイッチ

スパルコ製フルバケットシート

外装類

C―WEST製N1フロントバンパー

C―WEST製サイドステップⅡ

カーボンボンネット（ブラック塗装）

カーボンエアロミラー

GTウイング

タイヤメーカー

TOYO　TIRES

ホイール

RAYS　GRAMLIGHTS57DR

・歌織搭乗車種・・・ポルシェ　911ターボ3．6（964）

カラー・・・シルバー

エンジン仕様

Ｍ６４／５０＋Ｆ１タービン
ブースト１．２ｋｇで最大７００馬力
足回り
メーカー不明のため省略
内装類
快適装備撤去
ロールケージ
追加メーター一式
メーカー不明フルバケットシート
外装類
フロントバンパー
サイドスカート
リアバンパー
リアウイング
タイヤメーカー
ＹＯＫＯＨＡＭＡ
ホイール
ＢＢＳ　ＬＭ

・貴音搭乗車種・・・日産　フェアレディＺ（Ｓ３０）
カラー・・・ミッドナイトブルー
エンジン仕様
Ｌ２８（３．１Ｌ仕様）＋「幻の」Ｆ１タービン
ブースト不明で最大８００馬力
足回り
メーカー不明のため省略
内装類
快適装備撤去
ロールケージ
追加メーター
メーカー不明フルバケットシート

外装類

前後エアロバンパー

オーバーフェンダー

ヘッドライトカバー

ドアミラー

リアスポイラー

タイヤメーカー

DUNLOP

ホイール

RSWATANABE　EIGHTSPORK

人物紹介

・小日向蓮

搭乗車種・・・マツダ　アンフィニＲＸ―７ｔｙｐｅ―Ｒ（ＦＤ３Ｓ），９１年式

誕生日・・・４月２７日

年齢・・・１９歳

オーラ色・・・黄

３４６プロに入社したばかりの新人プロデューサー。高校卒業直後にそのまま３４６プロに入社した。１９歳という若い年齢ながら愛機ＦＤを駆るその腕は本物。自らチューニングを行い、ロータリーチューンはお手の物。工業系の高校だったのもあり、車だけでなく、機械全般に強い。本人の話では、ＲＢ２６、ＳＲ２０も組む事ができるらしい。プロデューサーとしては変わっており、アイドルに対してはとても優しい。でも言い変えれば怒れない。例え、自分に危害を加えてきても怒らない程である。あまりにも真っすぐな性格で嘘もつけないほど。嘘をつかれても本気で信じてしまう。そのため、年少組のイタズラに引っかかる事もしょっちゅう。だがそんな真っ直ぐな彼の性格に惹かれるアイドル達も多い。ただ、本人全くの無自覚の天然ジゴロ。また年齢が年齢なので大人組からは可愛がられている。最近は年少組との遊び相手になる事もしばしばある。小日向美穂とは親戚。

・原田美世

搭乗車種・・・日産　スカイラインＧＴ―Ｒ　Ｖ―ｓｐｅｃ（ＢＮＲ３４），９９年式

誕生日・・・１１月１４日

年齢・・・２０→２１歳

オーラ色・・・赤

幼少期にカートをしておりそこで培った技術を持つ。カートの腕

前は全日本選手権でも通用する程のレベル。車好きだけあり整備は当然、チューニングも全て自身で行っている。
メカニックとしては非常に優れてるがアイドルとしては中々芽が出ない。特にビジュアル面に関しては自覚できる程である。ダンスだけなら一級品のポテンシャルを持つ。
愛機ＢＮＲ３４は誕生日に納車した自身の初の車。自分で少しずつチューンを行っていった。Ｒのそのカラーは蓮に作ってもらった色。（元のカラーはソニックシルバー）
蓮が来る前のプロデューサーにアイドルになる誘いを受けてアイドルになった物の、わずか２ヶ月でプロデューサーが事故死。プロデューサーの事故死のショックで茫然自失と化していた。だが、蓮との出会いで自分の中の「何か」が変わるのを感じた。そして蓮と共に望んだオーディションで敗退したものの、アイドルになった自分の決意をはっきりとさせる。蓮に作ってもらったＧＴ―Ｒのカラーである「ライドオンレッド」は「最高のステージで輝く」という意味を持つと共に、亡きプロデューサーの想いが詰まった美世にとってはとても大切な特別な色である。現在は蓮と共にアイドル業界を乗り切っていく。
ある時、特殊能力「ブレイク」が発現する。
・桜守歌織
搭乗車種・・・ポルシェ　９１１ターボ３．６（９６４），９３年式
誕生日・・・３月２７日
年齢・・・２３歳
オーラ色・・・白
物語の準主人公。７６５プロのアイドル。７６５プロの施設「７６５プロライブ劇場（シアター）」の通称「シアター組」のアイドル。
普段はアイドルとして活動する中で音楽教室の先生をやっている。
父が自衛官で知り合いが多い。
ひょんなことから、「秋川零奈」「瀬戸口ノブ」「島達也」に出会い島達也から愛機９６４通称「ブラックバード」を託された。

走りは危なっかしい物の破錠しないという、非常に独特な走り方をしている。お陰で付いた異名が「音速の貴婦人」。

・瀬戸口ノブ

搭乗車種・・・ポルシェ　９１１ターボ３．６（９６４），９３年式

「湾岸ミッドナイト　Ｃ１ランナー」の主人公。本編終了後は、銀色のラッピングが施されたブラックバードに乗っておらず、もっぱらバイクに乗ってた。島が帰国後、９６４を返すハズだったが、島の医師としての立場の都合上、９６４に自由に乗ることが出来なくなり、９６４を返還出来ずに９６４を持ち続けていた。

やがて、９６４は車検切れとなり、キムスクのガレージで自身のＦＤと共に封印されていた。だが、時々検切れの９６４を動かす事があった。「伝説のマシンを朽ちさせないため」に時折走ってたという。

・秋川零奈

搭乗車種・・・日産　スカイラインＧＴ―Ｒ（ＢＮＲ３２），８９年式

「湾岸ミッドナイト」の登場人物。本編後、渡米によるモデル活動を経て帰国。ベテランモデルとして活躍。現在は後輩の育成に専念している。後輩に若宮イヴがいる。イヴからは師匠と仰がれる。本編で乗っていたＧＴ―Ｒも健在。

・島達也

搭乗車種・・・ポルシェ　９１１ターボ３．６（９６４），９３年式

「湾岸ミッドナイト」の準主人公。本編終了後の続編「Ｃ１ランナー」でノブに自身のブラックバードを預けドイツに留学。帰ってきた後病院の院長になり昔のように走る事が出来なくなっていた。ノブが持つ９６４を処分しようと踏み切ることも出来ず、時間が経ってしまった。

歌織の運転を見て歌織に自身の９６４を託した。

・四条貴音

搭乗車種・・・日産　フェアレディＺ（Ｓ３０），６９年式

誕生日・・・1月21日
年齢・・・18歳
オーラ色・・・紫
物語の準主人公。765プロのアイドル。「朝倉アキオ」が乗っていた「悪魔のZ」を駆る。ラーメンが好き。Zを見つけた時は「物の怪」と呼んでいた。だが、Zの魔力に染まって行った。
走りは非常に高レベル。蓮と美世、そして歌織を「Zで戦う意味がある相手」と認めている。
・朝倉アキオ
搭乗車種・・・日産　フェアレディZ　VersionST（Z34），08年式
「湾岸ミッドナイト」の主人公。本編終了後も長らくZに乗っていたが、時代の流れと共に老いていく自分がZと共に走れなくなっていく事を感じ、若いドライバーにZを生き続けさせてほしいと願い、Zを降りた。その後Zは貴音がドライバーとなる。現在も非常に高レベルな技術を持ち、本気出してなくても美世を戦意喪失させるほど。

物語の裏話（ネタバレ注意!!）

・物語のベース

「湾岸ミッドナイト」と「首都高バトル」となってますが、実際は「湾岸ミッドナイト」の方が多いです。これは「湾岸ミッドナイト」の方が自分は詳しいためです。「首都高バトル」はあまりやった事がないんです・・・。

・「湾岸ミッドナイト」「首都高バトル」本編＝首都高全盛期

物語序盤で原作後の事だと分かってもらえたと思います。美世が働く工場の親方こと、「内藤健二」。「首都高バトル」では「追撃のテイルガンナー」と呼ばれた彼が語るように首都高ランナーは彼も含め、首都高を降りています。

なぜかと言うと三章でも言ってますが、現実の走り屋の場合でも栄枯衰退は必然だと思います。何よりも、ゲームのライバル達のその後を書きたかったという点が大きかった為です。

・原田美世のモチーフ

美世の人物像についてですが、明確なモデルはないです。ただ、カート経験者という設定を付ける事でドライバーとしてもメカニックとしても英才教育された・・・という設定です。

ただ、それ故にアイドルとしては中々芽が出せなかった・・・。という感じですが。

車についてはＢＮＲ３４のチューンドカーの中でも「ＭＣＲ」の魔王号を参考にしてます。

「Ｈｏｔ―ｖｅｒｓｉｏｎ」の企画「峠最強伝説」で藤田エンジニアリングのＦＤ３Ｓを破って最速車の称号である「魔王」を得て脚光を浴びた車です。ここまで聞くと峠の車というイメージを持ちそうですが、実車における足回りが実は首都高でのアタックにも特化したセッティングになっているのです。

また、ＭＣＲの代表「小林真一」氏はかつて首都高速道路・都心環状線（Ｃ１）での過激な走りで「首都高番長」として名を上げた他、伝説的な走り屋チームとして知られる「５６５（ゴルゴ）」にも所属して

いた首都高出身のチューナーでもあるのです。

・小日向蓮のモチーフ

こちらも明確なモデルはありません。オリジナル要素多いです。武内Ｐとは別の意味でアイドル達には丁寧に接する人物です。この辺は短編「小さい日向の少年と少女」を見てください。

車については美世のＲ３４と同じく「魔王」の称号を持つ藤田エンジニアリングのＲＸ―７魔王号を参考にしてます。見た目はリトラクタブルライトのままの高橋○介の雨宮ＦＤと考えてください。

・鈴木一義のモチーフ

美世をスカウトした彼。名前からわかった人もいると思いますが、現モチュール監督の「鈴木豊」氏と現役時代には「日本一速い男」と呼ばれた「星野一義」氏をモデルにしています。劇中では登場しませんでしたが、彼もスカイライン（ＤＲ３０）に乗っています。

ここからは作中の小ネタの説明です。

・物語の世界観

「湾岸ミッドナイト」「首都高バトル」の出来事があった後の世界です。劇中では「バンドリ！」の人物が若干登場してますが、「アイドルマスター」と「バンドリ！」の人物達は同じ場所（？）で活躍してる設定です。蓮が劇中でブラインドアタックを披露するシーンがありますが、元ネタの「頭文字Ｄ」は「漫画」という扱いです。蓮はそこから技を使った、という事です。

・瀬戸口ノブの動き

四章で登場した「湾岸ミッドナイトＣ１ランナー」の主人公「瀬戸口ノブ」。彼は本編後、９６４の処分に踏み切れずに長い時間が経った・・・というのはここでの話。ここでは本編終了後に再びバイトを色々やった後、「Ｃ１ランナー」で自分が乗ってたＦＤをチューンしてくれた「木村進」通称キムスクの元で働いてました。そこで得た給料を９６４の維持に回していたのです。

・Ｚのクラッチトラブル

五章のバトル中にクラッチトラブルを起こしたＺ。これは「湾岸

ミッドナイト」で黒木のＲ３３とのバトルしてた時の出来事。ここでの事と原作ではタイミングは違いますがクラッチトラブルが起きてます。（ここではバトル中、原作ではバトル後）

その後北見しか整備できないはずのＺを原作では山本社長が、ここでは美世が修理しています。

・アキオのＺ３４

Ｓ３０を降りた後にＺ３４に乗っていたアキオ。

実はアキオ本人は関係ないですが「首都高バトル」シリーズと「街道バトル」シリーズを組み合わせた作品「レーシングバトル」で赤いＺ３３が出ています。が、そのＺ３３の左フロント部分が青いＳ３０になってるというとんでもない左右非対称カスタムが行われてるのです。

「首都高バトル」ではよくＳ３０が登場するのもあり、このＺの設定を借りてます。ただ、物語の年代が年代なので新型のＺ３４の方が合うと思い、Ｚ３４をチョイスしました。もちろん、左右非対称ではありません。

・蓮の美穂へのプレゼント

八章で蓮が美穂にプレゼントしたシロクマのキーホルダー。

これは美穂が好きなクマが関係してます。

・美世のＲ３４のウイング破損

これは「頭文字Ｄ」での出来事が元ネタ。大宮のロードスターのＧＴウイングがアクシデントで壊れた事の再現。美世のＲ３４のウイング破損の経緯が経緯ですが・・・。ウイング破損の結果、大宮のロードスターはスピン。美世のＲはクラッシュ寸前になり、蓮に助けられてます。

・題名の意味

「疾走のＲ」というタイトルですが、「Ｒ」はどんな意味か考えたと思います。一応、メインの意味は美世のＧＴ―Ｒの事。でもＲ（ロータリー）とかＲ（蓮）とか色々あると思います。

なので、答えは「美世のＲ以外には決まった意味はない」です。皆さんで意味を考えるのもＯＫです。

用語解説（ネタバレ注意!!）

・３４６プロ

正式名称「美城プロダクション」。美世が所属する芸能プロダクション。かなりの規模であり、島村卯月や高垣楓など売れっ子アイドルを多数売り出している。複数の部門から成り、蓮はアイドル部門に新しくやってきた新人プロデューサー。

・シンデレラプロジェクト

３４６プロのアイドル部門が立ち上げた企画。島村卯月などがメンバーだった。現在は2期生が活動している。

・オーラ

高い技術を持つ走り屋が乗る車から現れるという物。車に限りなく近い一体感を感じた時に発現するらしい。オーラは色があり、その走り屋の「素質」により色が決まる。中でも白いオーラは非常に珍しく、白いオーラが出る歌織は一目置かれる存在。

・悪魔のＺ

かつて首都高に存在した伝説のマシン。まるで意思を持つかのように、また「くるおしく身をよじるように」走り、何度もクラッシュを繰り返し、数々の死亡者や負傷者を出したことから「悪魔のＺ」として伝説化したＳ３０Ｚ。あるチューナーにより制作された後オーナーを変えながら走り続けていた。とある男がオーナーになり、やがて神格化される程の存在になった。やがて手放された後に貴音が乗機とした。

・迅帝

首都高の走る伝説と呼ばれる走り屋。ベイサイドブルーのＢＮＲ３４スカイラインＧＴ―Ｒであらゆる首都高ランナー達を次々と撃墜した。しかし突然姿を消し最速の称号だけを残して消えた。

・ブラックバード

かつて「首都高速湾岸線の黒い怪鳥」「ブラックバード」「湾岸の帝王」と呼ばれた漆黒のポルシェ９１１を駆った存在。「悪魔のＺ」の仲間だった過去があり、幾度も争った。瀬戸口ノブの手に渡った後、歌

織の手に渡った。

・ブレイク

ある感情が高まった時に発現するという一種の特殊能力。これはオーラとは違い、発現する人物はごく僅かしかいないとされる。発現すると情報処理能力や判断速度、空間認識能力が飛躍的に向上する。一ノ瀬志希がいた海外の大学で発見されたが、非現実的だったために疑問視され、研究が止まっていた。その為当初名前はなく、志希が命名した。美世のみが発現できる。

発現すると美世の瞳から光が消える。

・オールスターライブ

７６５、８７６、３４６といった３つのプロダクション合同ライブ。クリスマスに行われる。

・渋谷駅前交差点発砲事件

「オールスターライブ」の日にあった出来事。蓮の復讐の為に村岡が７６５、３４６プロのバスを制圧し、蓮の殺害を狙った事件。一般人も人質に取った事など、凶悪犯罪として連日報道された。

・Ｄ―ＬＩＮＥ

新たに設立された新チーム。スーパー耐久に参戦する。ドライバーは小日向蓮。